

鵠沼

久久比奴末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 8 6 号

再考「岸田劉生の住んだ別荘」

——家具レイアウトを含む復元作業の記録—— … 岡田 哲明 … 1

かながわとの縁 …………… 山中 恒 … 23

伊藤海彦の青春風景 …………… 伊藤 聖 … 24

旅先で出会った 三人の鵠沼人の仕事

——天野芳太郎・長谷川路可・杉原千畝—— …… 渡部 瞭 … 34

鵠沼に80年住んで

よき時代、よき友達 …………… 宮崎 弥代 … 44

「二つの湘南文庫」補遺 …………… 伊藤 聖 … 50

関根久男さんをしのんで … 柳谷あき子… 52

「鵠沼を語る会」活動の記録 …………… 総務委員会… 54

編集後記

『新編相模風土記談』（天保13年、1842）に、「鵠沼村久久比奴牟良」

とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠沼を語る会 発行

再考「岸田劉生の住んだ別荘」

—家具レイアウトを含む復元作業の記録—

会員 岡田 哲明



復元模型写真

2002年9月17日から29日まで藤沢ルミネプラザ6階、藤沢市民ギャラリー常設展示室にて開催された「華ひらいた鵠沼文化展」—東屋・劉生・龍之介—（鵠沼を語る会、藤沢市教育委員会共催）は3000人を越える入場者をかぞえ盛況のうちに終了した。内容は前年の鵠沼公民館まつりに展示した「東屋ものがたり」をベースに構成されたが「劉生コーナー」については新たに資料を整える必要があった。

「劉生コーナー」は「鵠沼での生活」「麗子と村娘お松」「劉生が描いた山」「住まいの復元」の四部構成とした。「鵠沼での生活」では家族や友人との交流、製作中の劉生の写真などを。「麗子と村娘お松」では1961年に二人が再会したときの写真と週刊誌の記事を。「劉生が描いた山」では本誌85号に伊藤聖会員が発表されている論考の内容を。「住まいの復元」では間取りの復元のみにとどまらず内外装、建具、

仕上げ材などの考証をし、家具レイアウトを記入した 1 階 2 階平面図、四方向立面図、仕上表、復元模型を作成して展示した。この復元作業によって劉生とその家族の生活ぶりや制作の態度、交友のありさまなどがどんなであったかを「すまい」から読み取ることも可能であるが、それは今後の課題とし本稿では触れない。



岸田劉生の住んだ別荘「松本陽松園」の間取り復元の試みは佐藤和子、西忠保、有田裕一、高三啓輔、鈴木三男吉の五会員によって行われ本誌 76 号 77 号にその成果が発表されている。・

失われた建物の間取り復元の試みは郷土史上、文化史上おおいに意味のあることでその着眼は高く評価されてよい。しかし、その検証手法（主として麗子の文章と川戸マツの記憶による）や検証結果（建築的に不自然）には、やや不備不足があるように思える。今回展示のための復元考証をするにあたり、より多くの検証資料を探し出し、なかでも主観の入りにくい写真やスケッチ（日記の絵の部屋別分類）を重視して再検証を行ったものである。検証結果は、より実体に近いものになったつもりである。

再考「岸田劉生の住んだ別荘」として稿を起こすのは先輩諸氏の業績の補正、補完が目的であって前論を否定するものではない。

検証資料

今回使用した検証資料は以下のものである。

◆ 文章（間取りについて記述のあるもの）

- 1) 岸田麗子著「父岸田劉生」雪華社 (62)、読売新聞社(79)
- 2) 岸田劉生全集 第 9 巻 月報 7「藁日記抄(七)」岩波書店(79)
- 3) 岸田劉生全集 第 5～8 巻 岩波書店(79)

◆ 写真（建物の内部、外部が写っているもの）

- 1) 関東大震災で倒壊した家の写真
- 2) 麗子お松再会写真
- 3) 劉生関係の書籍、美術書、展覧会カタログなどで紹介されているもの

◆ 絵画、日記の中のスケッチ

- 1) 岸田麗子が描いた「1923 年 8 月の思い出」（1958 年制作油絵）
- 2) 岸田劉生全集 第 5～8 巻には鵠沼時代の生活ぶりが絵日記（建物の内部、外部が描かれているもの）として描かれている

◆ 生き証人（現在存命でこの建物について記憶のある人）からの聞き取り

1) 川戸マツ（村娘像のモデル）

2) 白鳥和正と姉（震災後、再建された家に父、次郎と昭和 10～32 年ころまで住む。西洋館の記憶）

以下、おのおのの資料ごとに考察をおこない全体像を浮かび上げたい。

注：方位の表現について

鵠沼の道路はほぼ碁盤目状であるが方位は約 45 度振れているので正しく表現すると煩雑になる。本稿では便宜上、学園通りが南北に通っているものとして扱う。つまり南へ行けば鵠沼海岸駅、北へ行けば湘南学園という風に表現する。

◆ 文 章

1) この本が家の間取りについて尤も詳細に記述されているが、著者麗子は 3 歳から 9 歳までが鵠沼時代。はたして 9 歳の子供の記憶がどれほど正確か、やや疑問はあるが該当部分を抜粋する。

「(玄関の)格子を開けると三和土に靴脱があり 2 畳の玄関があつて、玄関を中心に向って右に 8 畳の座敷があり、奥に 4.5 畳の茶の間、その左が 3 畳の女中部屋でその奥に風呂場があり左手に台所があつた。8 畳の座敷は庭に面してかぎの手に廊下があり（のちに玄関の壁を壊してドアに改造し、来客は部屋を通らずに廊下を通じて洋館の方へ行かれる様にした）一方は茶の間に通じ、一方は床の間と押入れになっていた。8 畳の廊下の突き当たりに便所があり、その右に洋館に通じる半畳の廊下があつてそこに立つと目の前が画室のドアで左に 2 階へ行く階段があつた。洋間は 8 畳だった」

2) 大正 6 年 7 月 3 日付、劉生の妻、葵（しげる）25 歳の記述。

「6 月 24 日にこの家に移転した。（中略）この家は 8 畳の座敷に 4.5 畳の茶の間、3 畳の玄関に 3 畳の女中部屋、湯殿もわりにきれいだ。それに縁側に続いて洋館がある…洋館は 2 階もあつてそこには畳が敷いてあるので劉生様の御書斎になっている。下はゴム引きの、全くの洋室で画室専用にしてある。ひろさは上下とも 8 じきだ。」

3) 劉生の日記で間取りの記述は無いが、浴室改修、台所増築、玄関から廊下へのドアの設置、画室の北窓の拡大案（大工に不可能と言われ断念）、洋館の色の塗り替えなど家に関する記述が散見される。

考 証

さて、これらの記述の共通点はどこか、相違点はどこかを見てみよう。

各部屋の位置関係は 1) によってほぼ分ると言ってもよい。部屋の大きさは座敷 8 畳、茶の間 4.5 畳、女中部屋 3 畳、までは 1) 2) ともおなじだが、玄関は 2 畳、3 畳と、食い違っている。今回は 25 歳の主婦の記述のほうを採用した。

西洋館は 1, 2 階とも 8 畳となっているが、今回 10 畳の広さと考えた。理由は後に述べる。

台所の広さ、湯殿の広さ、便所の広さ、収納部分は全く記述がないので一般的な広さで考えることにする。設備的に考察すれば、給水は井戸水の汲み置き、排水は浅い溝に誘導し浸透し小さな流れへ、汚物は汲み取り式、燃料は薪炭、照明は電灯と蠟燭の併用。暖房は石油ストーブ、炭ストーブ（この 2 つは和辻哲郎から貰ったもの）、火鉢である。天火を購入するがこの熱源も炭であつたろう。

台所には竈があり水瓶があり薪炭がありとなれば床が土間であつた事は疑いない。

◆ 写 真

1) 1923 年 9 月 7 日、片瀬の写真屋が通りかかり撮影させたもの。関東大震災から一週間もたたぬ日、倒壊した松本別荘での劉生一家を含む大人 5 人、子供 3 人が写っている。今まで誰もが写っている人物にしか関心を持たなかった。

私はこの写真から倒れる前の建物の大きさ、間取り、構造、使用されている材料、建具類、建物のグレード、倒れた方向とねじれ方、等を読み取ろうとした。

2) 1961 年 7 月 27 日撮影。お松をモデルとした「村娘坐像」が週刊朝日(1961.5.12)の表紙になったのが縁で麗子と村娘お松は 40 年振りに劇的な再会を果たし懐かしい鵜沼の旧居の辺りを散策する。震災時倒壊を免れた西洋館は昔のまま建っていた。

考 証

1) の写真から分る限りの事柄を拾い出してみよう。まず倒壊したのは和風部分であつて西洋館は写っていない。耐力壁のバランスのよい西洋館は倒壊を免れた。

和風部分の構造は木造平屋建て、主要部分は寄せ棟造り瓦葺き。間口 4.5 間、奥行き 3 間、棟の長さ 1.5 間である。L 形の廊下は幅 4～4.5 尺の広縁、屋根は主要部の瓦屋根から一段低く葺き始められ下屋状をなしており金属板（おそらく鉄板）の平板葺きである。廊下の建具は座敷との間は額入り障子、庭との境はガラス戸、雨戸が設けられている。今ひとつハッキリしないが鴨居の上にガラス戸または武者

窓様の開閉のできる欄間があったようにも見受けられる。西洋館との接続部分では軒桁からの垂木の出がいかにも短い。これは軒の出を後から切り縮めたもので西洋館が後から増築された事を示している。

瓦屋根の主要部分に上記の各室をはめ込むのは面積的に不可能である。はみ出し部分はL形廊下と同じように下屋として作られたであろう。台所、湯殿、便所などなお、倒れた方向は東から西へ、やや時計回りにねじれて倒れたようである。東面南面には殆ど壁がなく、構造力学的に見て極めて地震に弱い建築であった。

2)の写真は通称学園通りに面する側（東面）の西洋館が写っている。2 階の上げ下げ窓が壁面の中央に1箇所あるのと棟飾りがあるのが重要である。この棟飾りは専門用語でいう宝形（ほうぎょう）の屋根、四角錐の頂点に付いていて西洋館は正方形プランの建物であった。外壁は合い欠きまたは本実加工された板を横張りに用いてありペンキ塗装である。

3)家の前で来客と共に撮ったものや劉生、麗子のポर्टレートに建物の一部が写っているがそれから建築を類推出来るほどの資料はない。むしろ、アトリエや書斎内でのスナップに窓の位置や家具レイアウトが判明するものがある。

◆ 絵画、日記の中のスケッチ

1) この絵は岸田麗子が25年前を回想して描いた。麗子の次女夏子（画家）は横浜市美術館ギャラリートーク（02,9,28）の席上で「母は写真をもとに本当に懐かしがりながらこの絵を描いた」と言っている。

2) 日記の絵を部屋別に分類すると a)玄関 b)座敷および広縁 c)浴室 d)画室 e)書斎兼寝室 f)外部に分けられる。女中室、台所、便所については絵がない。茶の間は明確にそれと分る物はない、座敷か茶の間か不明といったものはある。

考 証

1) この建物は西洋館であって先の写真の面とは違う南面を見ているのである。白い窓枠が引き違いのようにも見えるが2連の上げ下げ窓であろう、元の写真を見たい。

2) これらから分った事を列記する。

a) 玄関

入り口の扉は引き違いの棧唐戸である。戸を開けると正面が上がり框で3畳の畳が敷いてありもっぱら書生部屋に供せられていた。

b) 座敷および広縁

座敷の北側は押入れと床の間であることは麗子の記述にあるが床の間は向かって右か左か不明である。これが日記の絵を見れば一目瞭然、右が床の間、左が押入れが正解。建具は玄関、茶の間に通じるところは襖、L型の広縁との境は額入り障子、夏は障子を片付け、御簾を垂らしていた。廊下の外部側はガラス戸と雨戸であった。家具は箆笥 2 棹、角机、螺鈿の飾り棚、冬には火鉢などが置かれた。

c) 浴室

葵の日記には「湯殿」と古典的な記載。床はモルタル塗り、腰壁はタイル張りのようで縦横の線が目地らしくみえる。木製の角風呂に 4 枚の板の蓋、洗い場はすのこ敷き、金盥、洗濯盥が置いてある。外部に面して引き違いガラス窓縦格子付き。外へ出入り用の木戸。釜の焚き口は内か外か不明。電気は引かれていず、蠟燭であった。水道は勿論無く井戸水を汲んで使用した。

d) 画室 (アトリエ)

画室は洋館部分の 1 階、葵の日記では 8 畳の広さ、床はゴム引きとあるが、この建物は正方形であったから西側半間が階段とすると残りの空間は 6 畳(2 間四方の場合)または 10 畳 (2.5 間四方の場合) でなければならない。洋間の天井高は高かったと思える (2.7~3.0m くらい) から階段の勾配を考えると 2.5 間四方つまり部屋の大きさは 10 畳野広さと推定した。尤も昔の階段は梯子のように急勾配のものもあるから 2 間四方、6 畳の可能性もある。壁面に目を転じると、北側中程に上げ下げ窓が一ヶ所ある。こ窓枠にお菓子をぶら下げてそれを注視させ、幼児のモデルが動かないよう工夫したことが日記絵にみえる。この窓を背にして北採光となる位置にイーゼルを置いている。東面も中央に上げ下げ窓が一ヶ所、南面には同じデザインの上げ下げ窓が二つ並んで設けられていた。麗子の油絵に描き込まれているのがそれである。東と南の窓にはカーテンが吊ってあり製作中余分な光を遮蔽していた。西面は両端にドアがあり向かって左が入り口、右は押入れの扉であった。その間の壁の前がモデルの位置でモデル台が置いてあった。北窓のほうを向かせるから、麗子もお松も右向きの絵が断然多いのはこのためである。東の窓の左の壁には静物用の机 (小さなすわり机を 2 段に重ねてあった) が置いてあった。劉生の座る位置から見るととき左からの光線になる訳で、鵠沼時代の静物画は左光線の作品が多い。ほかに家具としては籐の丸椅子 2 脚、籐の肘掛け椅子が 2 脚、籐の丸テーブル、劉生用の肘掛け椅子 (2 階デスク用を転用?)、本箱、絵の具机、灯油の丸いストーブなどが日記絵に登場する。

e) 書斎兼寝室

画室の真上がこの部屋。葵の日記に 8 畳とあるのは 2 畳分の板敷きがあったのではないかと推測した。壁面の窓配置は 1 階と同様であると思われる。西側壁面のドアの位置も同様だが部屋に入るドアは向かって右のがそれである。この部屋の家具は執筆用のデスク、オルガン、オルガン用の丸椅子（デスクの椅子兼用）、蓄音機、イーゼル、籐の丸椅子、丸いちゃぶ台、籐の寝椅子、本箱、火鉢（夏はここに蚊取り線香を焚いた）など。ここで日本画を描くときには四角いすわり机を持ち込むときもあった様だ。

f) 外部

絵日記の中にごくわずかだが家の外のスケッチがある。大正 11 年、春のもので「門がよくなる」「足場をかけた画室と 2 階」「西洋カン赤くなる」などの説明文が付いている。「西洋カン…」では学園通りの北から見た図で洋館と母屋の関係がよく分かる。

◆ 生き証人

1) 川戸マツ(1911～)

彼女は麗子より 3 歳年長であり、1918～1923 の間、劉生の絵のモデルとなった。母親が台所の手伝いに来るのに付いて来て劉生の目に止まったという。モデルをしたときの様子などの記憶は明快だが、家の間取りなどは不確かで L 型の広縁を行くと画室であったこと程度、2 階は上がった事もないそうである。

2) 白鳥和正 (1941～)

彼の父、白鳥次郎は 1935～1957 の間、約 22 年間に鵜沼松が岡 4・7・10 即ち劉生の跡地に居住した。白鳥家の家族は震災に残った西洋館に住んだ生き証人達である。和正は当地で生まれ 16 歳までを過ごした。彼の記憶では洋間の大きさは判然としないという。彼とその姉とで作製した間取りを書いたメモを入手した。

考 証

1)2)の証人から今回は明確な証言は得られなかった。白鳥メモによれば震災後の建物は西洋館は大きく手を加えられる事無く残存したが和風部分は全面的に建替えられて面積も広くなり間取りもすっかり変わっていることが判明した。

◆ 内外装仕上材料の推定

考証の場面で言及している箇所は重複するが仕様として以下にまとめて置く。

外 装

和風部分：基礎は軟質砂岩の切石、外壁は広幅杉板の横下見張り押し縁おさえ無塗装、屋根は寄せ棟本瓦葺き、下屋、庇は金属板平板葺き

洋風部分：基礎は軟質砂岩の切石、外壁は小幅の杉下見板横張りペンキ塗装、屋根はスレートまたは金属板平板葺き、棟飾は金属製、窓は鎧戸なし

内 装

和風部分：和室の床は畳、廊下、広縁、便所の床は縁甲板張り、壁は土壁、天井は棹縁天井、玄関踏込はたたき、台所床はたたき、浴室の床はモルタルにスノコ、建具は襖、障子（座敷は額入り障子）板戸（引き戸、開き戸）、雨戸

洋風部分：1階の床はリノリウム、2階は畳、壁は漆喰またはプラスター塗、天井は格天井、建具は木製開き戸、上げ下げ窓、階段は木製一本階段

設 備

電気設備：電灯のみ

給排水設備：給水は井戸、つるべ又は手押しポンプ、排水は浸透、汚水は汲取

熱源：薪炭、灯油（ストーブ）



上記考察から導き出された成果物は下記である。うち 1)2)3)5)を掲載した。

- 1) 1階2階平面図（家具レイアウト記入）
- 2) 4面立面図
- 3) 建物配置図
- 4) 復元模型
- 5) 模型写真

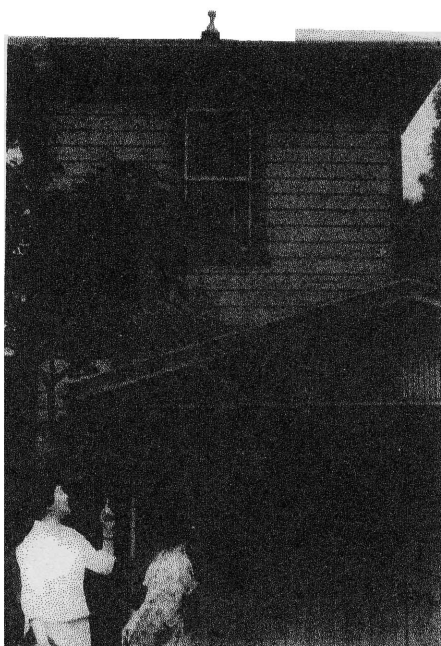
おわりに

岸田劉生の住まいの研究はこれで終わったわけではない。出展日時を限られたなかでの作業であったので資料収集も不十分であり誤まった推定のもとに事実と違った結果を導いたりしている箇所も多々あろうかと思われる。今後も資料集めを続けてよりの確な考証をして、より正確な復元を行いたいと思っている。

（文中、人名は敬称を省略させて頂いた）



写真資料：1)



写真資料：2)



絵画資料：1)



大12.2.2



大12.2.27



大12.1.16



大10.9.25



大12.6.27



大10.1.7

(茶の面かも?)

母屋 座敷(接客・団楽)

絵画資料：2)



大 10.3.29



大 10.12.30



大 10.9.12



大 10.12.1



大 12.7.20



大 12.3.2

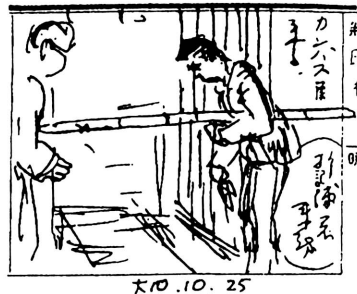


大 10.9.9

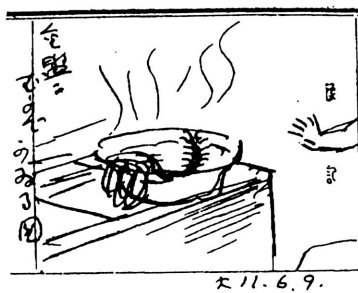
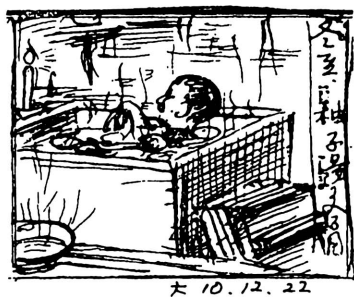
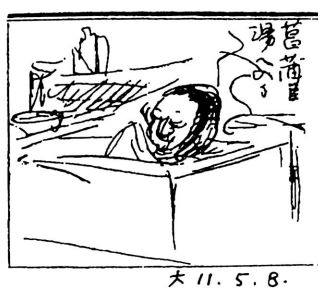
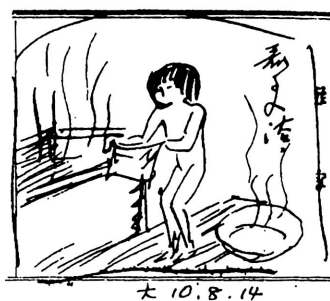


大 11.3.25

座敷(家具配置)



玄関



浴室



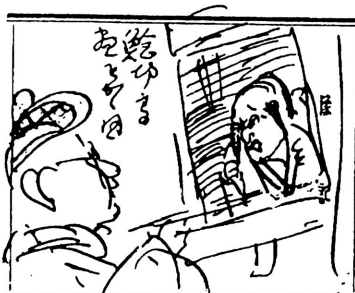
大 12. 4. 18.



大 10. 12. 18



大 10. 4. 12



大 11. 11. 16



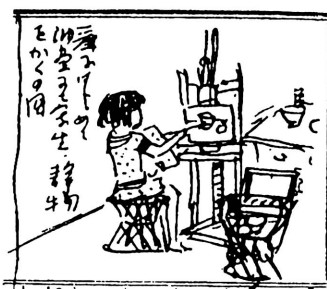
大 11. 12. 3



大 10. 7. 21



大 12. 4. 13.



大 11. 9. 16

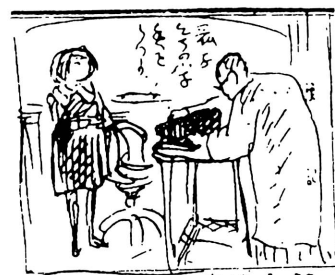


大 11. 10. 8

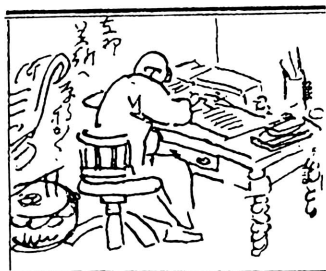
西洋館1階 アトリエ(制作)



大 11. 4. 12.



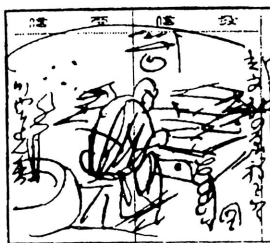
大 10. 3. 20



大 11. 12. 14



大 10. 3. 27.



大 12. 7. 15



大 12. 2. 25



大 12. 8. 22



大 12. 2. 27

書齋・寢室(執筆・接客)



大 11. 2. 20



大 12. 3. 29.



大 11. 6. 1



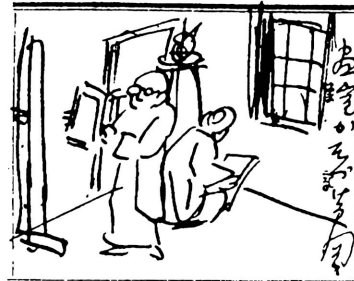
大 11. 1. 7.



大 10. 3. 14.



大 11. 2. 1.



大 11. 10. 4.

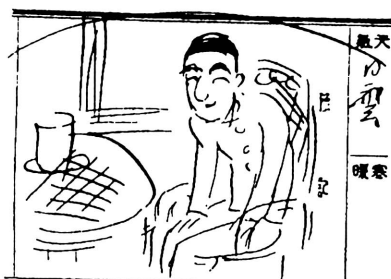


大 11. 1. 30

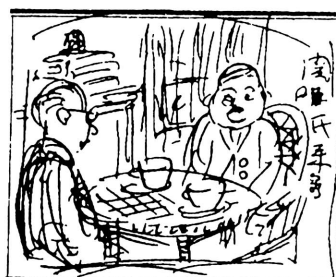


大 11. 1. 4.

アトリエ(家具配置)



大 10. 9. 11.



大 10. 9. 23



大 10. 12. 21



大 10. 10. 6



大 11. 5. 13



大 12. 3. 29



大 12. 4. 4.

アトリエ(接客)



大11.3.17



大12.2.14



大12.1.18



大10.4.15

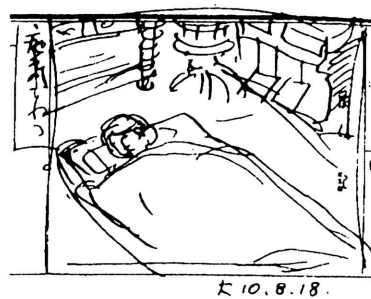
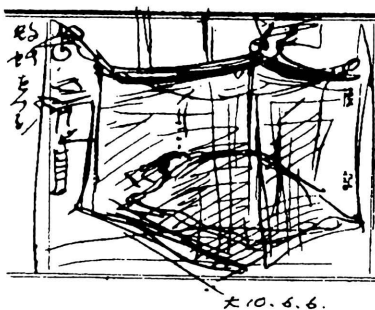
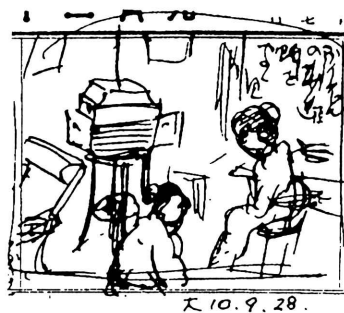
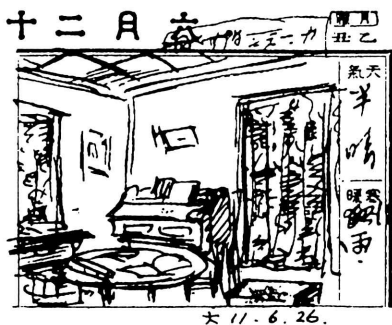
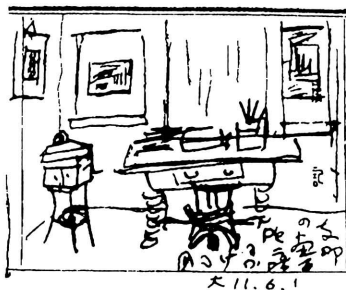


大12.6.29

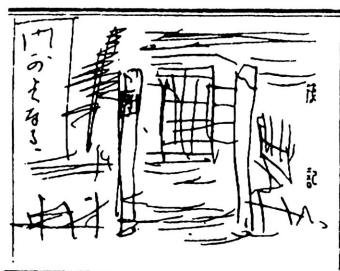


大12.8.27

西洋館2階 書斎・寝室(制作)



書斎・寝室(家具配置)



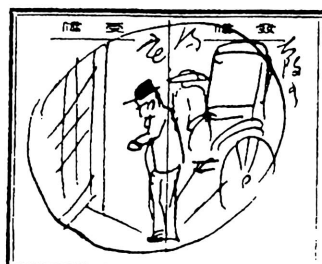
大 11.3.22



大 11.3.27



大 10.8.27

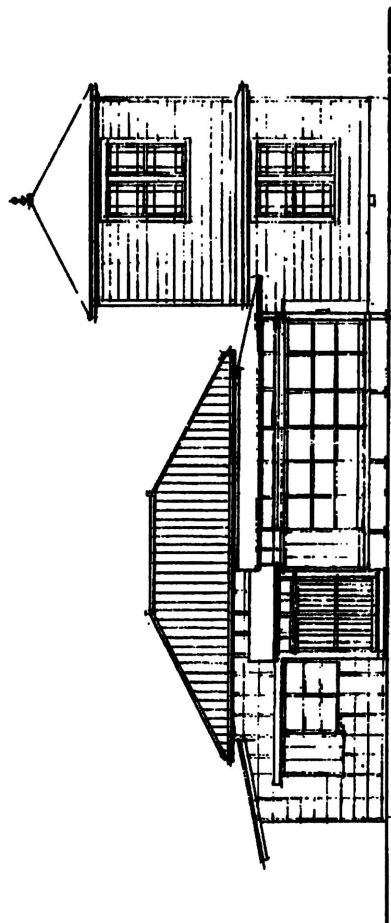


大 11.5.24

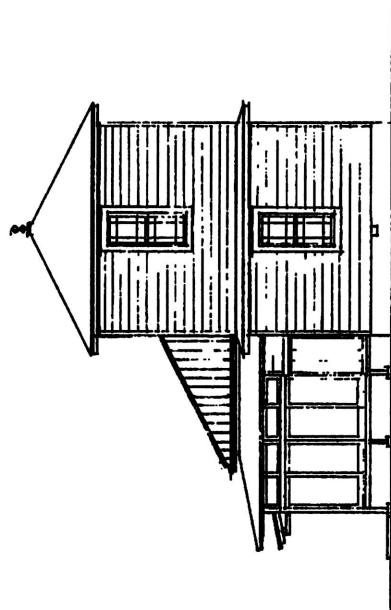


大 11.4.1

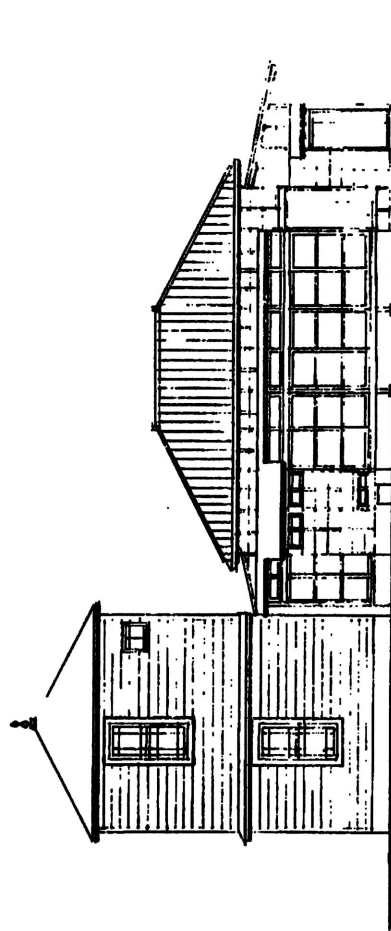
外部



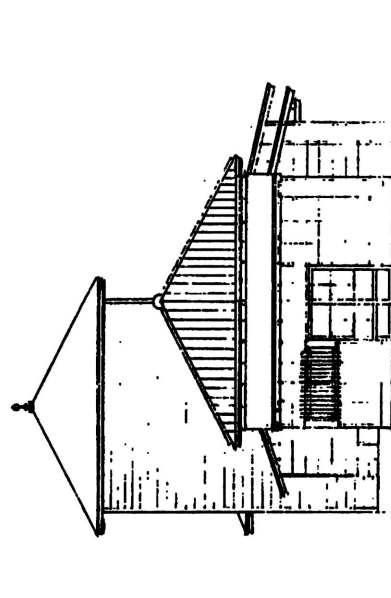
北西側面図



東南側面図

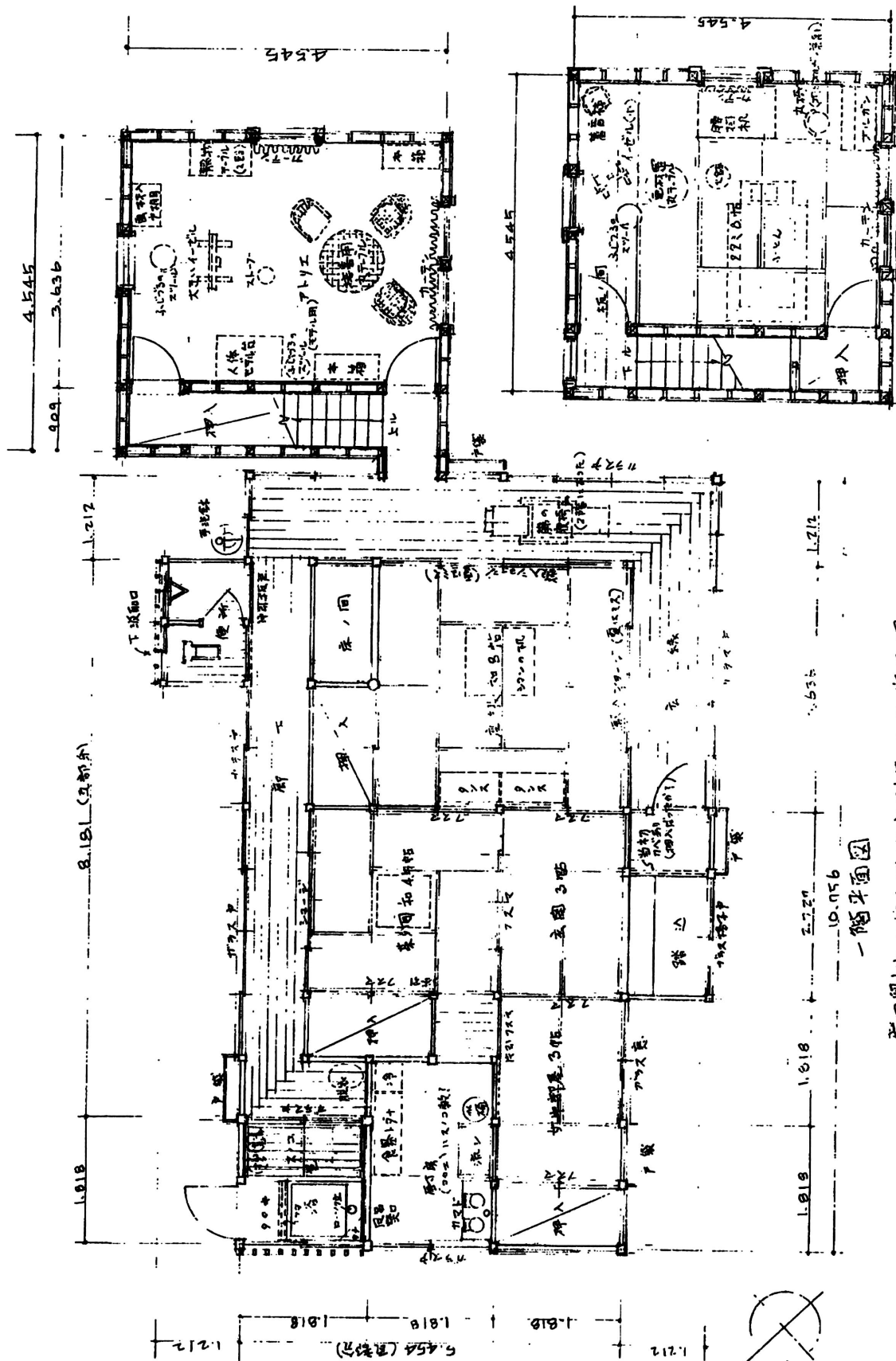


北東側面図



北西側面図

二岸空割生。住人長松本剛莊陸定復原図
2000 July. 29 Drawing by Okada.



岸田繁雄先生の住んだ松本別荘雅志・渡原四郎

2022. July-29 Drawing by Okada

住居表示
藤沢市鵠沼放牧園 4-7-10

旧地番
神奈川県高座郡藤沢町
鵠沼字下園 6734番地

学園通り (改正11.3.29 途中工事)

公園用地

鎌倉別荘門(不陸)

別荘空門 (改正11.3.29 右側一室のみ)

配置図、屋根伏図

※ 敷地の形状、大まかには位置図(94センチ)と
実測図(10センチ)をおおきく見ている

岸田劉生の住んだ坂本別荘、追加復原図
2002. July. 29 Drawing by Obada.

かながわとの縁

山中 恒（藤沢在住児童文学作家）

私が平塚市に住むようになったのは、小学校の二年からで、それまでは出生地の小樽に住んでいた。1939（昭和14）年のことで、平塚は人口四万、今までは想像もつかないほど淋しい町であった。私は子ども心にも、なんという田舎町に住むことになったのかと悲しがり、ひたすら小樽を恋しがった。

そのうちに友だちもでき、学校にもなれ、軍需工場の拡張で町もにぎやかになり、故郷を想う気持ちなど、あとかたもなく消えた。

敗戦の半年前、一家で小樽へ戻ったが、今度は逆に平塚が恋しくなっていた。だから、一年半ほどして平塚にもどったとき、戦災で町の様相は一変していたが、故郷へもどったような安らぎをおぼえた。

大学を出てからは、東京都内を転々としたが、五年前、ふとした縁から、今度は藤沢市に住むようになった。友人のアメリカ人から、家を譲り受けたのである。

転居の挨拶に隣家を訪れたところ、そこの主人から、お宅の地所はどういうわけか、物書きが住むようになっているらしいといわれた。確かに先住者の友人は、翻訳やら米会話辞典などの執筆をしていた。そこで、その前の住人の名を訪ねたところ、即座に名前が出ず、その人物の奇行について話が及んだ。

昼間、子どもがピアノの稽古をしていると、執筆の邪魔になると、血相変えて怒鳴りこんで来た。そのくせ、周囲の寝しずまった深夜、なにごとかと思うような奇声をあげて、激しく夫婦げんかをして、家中に皿や井が飛び交った。初めは、驚いて聞き耳を立てていたが、毎度のことなので気にもとめなくなった。その反動か、昼間は隣近所の人をにらみつけて歩いたという。

帰りがけ、隣家の主人が、その人物の名を思い出してくれた。宮内寒弥氏だったのである。そんなこともあって、私は古書目録で、彼の著書を見かけると、つい注文を出してしまうのである。

（昭和63年10月15日『神奈川近代文学館』第22号より）

伊藤海彦の青春風景

伊藤 聖 (会員)

藤沢市総合市民図書館が作成した『藤沢文学年表』（1996年）のあとがきに「つぎの方々については、藤沢での在住期間が現在までのところ調査が不完全のため、それらの方々に関する記述に正確さを欠いている」として、その21人のなかに「伊藤海彦」の名が載っている。海彦さんは平成7年（1995年）10月20日に亡くなられたが、生前親しくさせて頂いたものとして、この欠落はまことに残念である。幸い優雅璃夫人が鎌倉雪ノ下にお住まいなので、お話を伺って空白を埋めることができた。（以下敬称略）

1. 戦時中は信州に疎開

伊藤海彦は大正14年（1925年）1月1日、東京で生まれた。父松雄は新劇の脚本家として知られていた。昭和6年暁星小学校に入り、翌年夏から毎年、中学生になるまで腰越中原の別荘に避暑に来ていた。のちに片瀬に住んだのは、この夏の思い出が影響しているらしい。

太平洋戦争が2年目の昭和17年（1942年）暁星中学を卒業、日大芸術学科に進んだが、戦局が激しくなった同19年に父の郷里信州に疎開、諏訪市追手町2丁目に両親とともに移り住んだ。これから3年余の信州生活は、のちに彼のラジオドラマや詩のテーマとして度々とりあげられることになる。

戦争が終わっても東京は廃墟と化していて、すぐに戻れるような状況ではなかった。海彦は昭和22年日大を卒業、下諏訪中学校の国語教師となった。月給は340円であったという。当時、海彦に教わった篠遠允彦^{まさひこ}は「同時代」¹⁾に次のように書いている。

「出会いは、その年の四月から新制になった長野県下諏訪中学一年の入学式である。どんな式だったかは忘れたが、そのあと講堂からまだ体育館とはいわない雨天体操場に集められ、組ごとに担任教師が生徒の名前を呼んで、引率し教室に向かう。組とはいわず、部と呼んだが、三部の番になると、キャベツのように波打った髪、トンボのような眼鏡、カマキリのように尖った顎

の、ひょろひょろした年齢不詳の先生が名前を呼んだ」

「さて、席も決まり教師の自己紹介のとき、初めて伊藤海彦と黒板に書いた。珍しい名前と思うだろうが、昔話の海彦山彦の海彦で、これはオヤジが付けた名前だが自分でも気に入っている、というようなことをいったように思う。そして、今日はあと掃除をして帰るだけだけど、あまり一生懸命掃除すると腹が減るから、ざっとやろうといった。と思う、ではなくて、これははっきりと覚えている」



富士見高原の海彦（昭和62年）

この年の秋、諏訪に帰省していた友人の三輪誠を誘って、富士見にいた詩人の尾崎喜八を訪ねた。尾崎は二人に枯葉のくじ引きをさせた。三輪が貰ったのはリルケの訳詩だったが、海彦のほうは尾崎のオリジナルの詩だった。ともに美しい墨書で書いてあったが、ちょっとばかりうらやましかったと、のちに三輪は「黒の会通信」²⁾に書いている。この訪問以来、海彦は尾崎喜八を終生、師と仰いで敬愛した。

2. 上京して新月社に入社

同年8月、父松雄が亡くなり、海彦は下諏訪中学を退職して、東京に戻ることを考える。翌昭和23年春、三鷹市牟礼の石津方へ転居、宇佐見英治の「新月社」に入社する。これは同じ牟礼にいた串田孫一の推薦だった。「僕の若い友だちで伊藤海彦君といって、よい詩を書いている人がいるんです。まだ二十三歳ですが、そちらの編集部に入れてもらえないかしら」

宇佐見は「黒の会通信」に次のように書いている。

「敗戦後三年のことだ。飯田橋の近くに新月社という出版社があり、私は三十歳で編集部長をしていた。幸い一月後に編集部員の採用試験があるので、ともかくそれを受けるようにと串田さんに連絡した。もしそれに落ちたら、十五、六番の成績だったらどうしよう——当日は二十数名の受験者があったが、採点すると、海彦は断然一番で、それも鶴のように群を抜いていた。私は彼を見ぬうちから鼻高々となったのをおぼえている」

この採用試験が何月ごろあったのか分からないが、採用当時の月給は六千円であった。宇佐見は「東京で母上と二人で間借りしていたが、どこであったか、思い出せない」と書いているが、このころは転々としていたらしく、三輪誠の「大田区田園調布 2-848 小島様方」宛てに出した葉書が残っている。尾崎も串田も必要があるときは、新月社のほうに手紙を出していた。

宇佐見の文章のつづき、

「新月社の給料では母子二人が暮らして行けるはずがなかった。海彦は勤務のかたわらNHKのラジオ・ドラマの台本を書き、ひそかにそれを売りこんだ。一年後正式にNHKライターの公募試験があり、海彦は応募、合格した。そんなわけで新月社は一年と少しで辞めた」

新月社を退社したのは昭和24年の秋ごろらしい。

3. 片瀬西浜でキティ台風遭遇

NHK専属ライターとなる少し前の昭和24年（1949年）3月、海彦は「藤沢市片瀬西浜 2932」に転居した。この地番は非常に大きな区域なので、どこに住んだのか正確には分からない。後年になって海彦は「江ノ電各駅点描」³⁾のなかで、次のように懐かしんでいる。

「湘南海岸公園駅。以前は現在と反対側にあって、素朴な、いかにも江ノ電風のかためた土を古い枕木で囲んだだけのものだった。終戦直後、私はここにしばらく住んでいたことがある。駅を降りて境川の上にかかる西浜橋をわたったすぐの所で戦後の超大型台風として有名なキティ台風⁴⁾の被害にあった」

「この西浜橋や、少し上流にある山本橋などからみる川の眺めはわるくない。釣り船や水鳥の飛来をみながら散策するのめたのしいものである」

右ページは「藤沢の新居からの御葉がきを拝見しました」という尾崎喜八から海彦にあてた葉書である。3月30日付で、宛て名は「藤沢市片瀬西浜 2932 吉村様方」になっている。この「吉村」は吉村博次のことで、当時は二人とも矢内原伊作・宇佐見英治が始めた同人雑誌「同時代」に参加していた。経済的なこともあって同居していたらしい。この葉書のなかごろには、

「山から都会へ、そして今は海岸へと、君の移って行くあとを考えると歌のひとつづきのやうです。海のリルケ、いや寧ろヴァレリーを僕は思ひます。



君からの海のひびきをどんなに僕が待ってゐるかを忘れないで下さい。必ず
 やすばらしい幾つかの詩がこの春から夏へかけて生まれる事でせう」
 と書いてある。当時、海彦は尾崎、串田らと熱心に手紙で詩の話をしている。
 「リルケよりむしろヴァレリーを思います」というのは、南仏セートの「海辺
 の墓地」を歌ったヴァレリーの詩を、尾崎が思い出しているのであろう。
 信州から三鷹へ、そして片瀬へと転々と住まいを変えながらも、海彦は詩や
 ドラマの創作に励んでいた。ドラマについては後述するので、詩についてい
 えば「信州及信州人」「新詩人」「アルビレオ」(以上は1946年)「青年演劇」
 「新夕刊」(1947年)「詩学」「高原」(1948年)「青年演劇」「高原」(19
 49年)「近代文学」(1950年)など多くの雑誌に詩を発表している。
 このうち「アルビレオ」は串田孫一が編集していた同人誌で、アルビレオと
 いうのは白鳥座のベータ星の名である。語感がいいので詩句によく使われる。
 また「高原」は片山敏彦が主宰していた雑誌で「四季」派の伝統を受け継いで
 いた。海彦も「高原」には4編のソネットを寄せている。

これらの雑誌に発表された詩は、のちに「同時代」などの詩を加えて、処女詩集『黒い微笑』（1960年）にまとめられた。

4. 鵠沼海岸の松林に転居

片瀬に約1年間過ごした後、昭和25年春に海彦は鵠沼海岸の松林のなかの借家に転居する。神西清が同年5月18日に出した葉書の宛て名は「藤沢市鵠沼海岸 5305」となっている。その少し前と思われる（消印は不鮮明）3月11日と29日の三輪誠からの葉書は「鵠沼海岸 5305」と「鵠沼海岸 5311」になっているから、このころ転居した可能性がある。

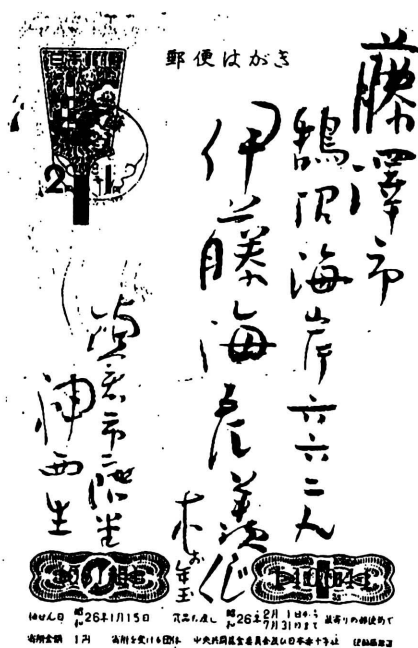
小田急「鵠沼海岸」駅から10分たらずの右の地図⁵⁾でA印のところである。上の二つの地番は隣接していたから海彦自身、家の場所がどちらの地番なのか混乱していたのかも知れない。現在の住居表示では「鵠沼海岸3-10-23」付近で、鵠沼銀座（現マリンロード）から海のほうへ入った右側である。

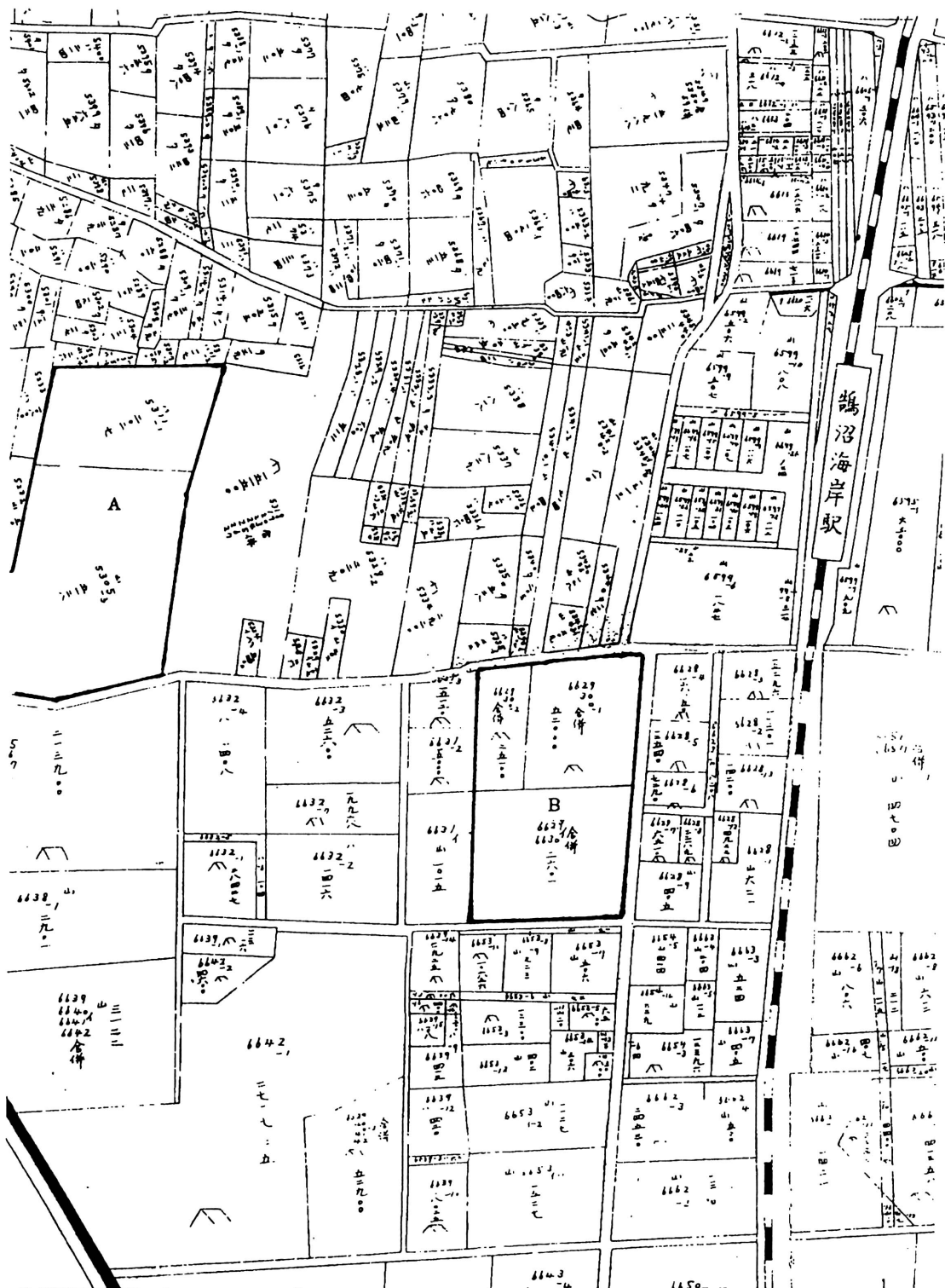
「鵠沼にいたのは戦後だが、まだ戦前そのままの状態ではやはり砂地の道ばかりだった。夜、東京から帰ってきて駅を降りると、踏みだした足の下感触がなんともいえなかった。東京での舗装された道ばかり踏んでいた足がほっとするようなやさしさだった。帰ってきたという実感を空気の味とともに私は蹴からうけとめたものだ」
（『江ノ電暦日』）

昭和26年の正月、神西清から来た年賀状（下右）の宛て名は「鵠沼海岸 6629」と



海彦が間借りしていたころの鵠沼庵（昭和25年）
「藤沢市制10周年記念写真帳」から





となっていた。それは図Aよりも駅に近いBで、かつての旅館「中屋」の敷地だった。いま「鵜沼海岸3-6」である。

中屋は現在のマリンロードに面していて、その敷地内には離れや貸別荘が何軒か点在していた。ここには明治時代に島田清次郎や吉屋信子が離れや本館に滞在している。関東大震災後は旅館の営業をやめていて、離れや貸別荘だけが中屋の名義になっていた。いずれにしても海彦が住んだ「鵜沼海岸 6629」は、かつての中屋の敷地であったことは間違いない。

しかし、同年6月以降の手紙の宛て先は、すべて同じ番地ながら「鵜沼海岸 6629 中野様方」になっている。当時、マリンロードに面して「鵜沼庵」⁶⁾という菓子店があって、中野一郎という人が大正7年から「鵜沼饅頭」を売っていた。優雅璃夫人によると「夏になって貸別荘に人が入るようになり、お饅頭屋さんの2階へ移ったという話を聞いたことがあります」とのことだった。結局、海彦は1年近くを中屋の周辺で過ごすことになる。

このころ、海彦が文通していた相手は来信が残っているだけでも、宇佐見、尾崎、串田、片山、神西ら既出の人のほか、堀辰雄、加藤道夫、古茂田守介、山室静、土方久功、遠藤周作、浜口陽三、渋谷龍彦、福永武彦、田中冬二ら、華麗ともいえる人脈を形成している。まだ電話も不自由な時代だったので、唯一のコミュニケーションが手紙だった。それぞれ独得の字体で、葉書一面にペンを走らせ、文学を語り、芸術に心を寄せあっているのをみると、伊藤海彦の青春風景が目に見えるようである。これらの人々もまた、みな若かった。

5. 数々の芸術祭賞・イタリア賞受賞

年も押し迫った昭和26年12月、海彦は海辺の町、鵜沼から去って鎌倉に移り住んだ。宇佐見は12月18日付で「先日鎌倉美術館のかへり、偶然吉村氏お目にかかり、転居のことをききましたら、もう昨日 通知がきました」と「鎌倉市台 1730 松橋様方」に葉書を出している。

この後も海彦は何度か転居するが、大船町台、山ノ内、極楽寺、雪ノ下と、いずれも鎌倉市内であった。したがって「鵜沼にいた詩人」としての伊藤海彦はこれで終わるが、ドラマ作家、あるいはエッセイストとして活躍するその後の海彦を駆け足でみることにしよう。右に海彦の業績をまとめておいた。

昭和30年代から40年代にかけては、ラジオドラマの仕事が多忙をきわめて、

伊藤海彦の仕事

- 昭和29年（1954年）7月 矢内原伊作らと『アルビレオ詩集』（書肆ユリイカ）を刊行
- 〃 33年（1958年）9月 ラジオドラマ「言葉と音楽のための三つの形象」（入野義朗作曲）
で日本初のイタリア賞を受賞
- 〃 （ 〃 ）9月 童謡集『風と花粉』（アルビレオ刊行会）
- 〃 34年（1959年）12月 放送詩劇集『夜が生まれるとき』（書肆ユリイカ）
- 〃 35年（1960年）11月 詩集『黒い微笑』（書肆ユリイカ）
- 〃 38年（1963年）9月 ラジオドラマ「ほんとうの空色」（入野義朗作曲）でイタリア放送
協会賞を受賞
- 〃 39年（1963年）11月 ラジオドラマ「虹の反映」（松平頼則作曲）で芸術祭賞を受賞
- 〃 40年（1965年）11月 放送詩劇「飛翔」（林光作曲）で芸術祭賞
- 〃 （ 〃 ）11月 女声合唱のための組曲「みえないものを」で芸術祭奨励賞
- 〃 41年（1966年）3月 放送詩劇集『吹いてくる記憶』（思潮社）
- 〃 43年（1968年）11月 男声合唱のための組曲「走れわが心」（大中恩作曲）で芸術祭奨励賞
- 〃 44年（1969年）11月 ラジオドラマ「海に落ちたピアノ」で日本賞文部大臣賞
- 〃 （ 〃 ）11月 女声合唱のための組曲「蝶」（中田喜直作曲）で芸術祭優秀賞
- 〃 45年（1970年）11月 混声合唱のための組曲「島よ」（大中恩作曲）で芸術祭優秀賞
- 〃 48年（1973年）6月 放送詩劇集『この青きもの』（五月書房）
- 〃 （ 〃 ）9月 ラジオドラマ「こどもとことば」でイタリア賞
- 〃 51年（1976年）10月 エッセイ集『走る歌——私の江ノ電』（藤沢風物社）
- 〃 52年（1977年）7月 エッセイ集『小怪の消息』（かまくら春秋社）
- 〃 53年（1978年）9月 エッセイ集『江ノ電暦日』（江ノ電沿線新聞社）
- 〃 （ 〃 ）11月 女声合唱組曲「ちいさな果樹園」（中田喜直作曲）で芸術祭優秀賞
- 〃 （ 〃 ）12月 エッセイ集『きれぎれの空』（湯川書房）
- 〃 55年（1980年）9月 詩集『影の変奏』（湯川書房）
- 〃 57年（1982年）7月 エッセイ集『旋律と風景』（国文社）
- 〃 （ 〃 ）8月 エッセイ集『季節の濃淡』（国文社）
- 〃 58年（1983年）10月 評論集『詩人の肖像』（共著・かまくら春秋社）
- 〃 59年（1984年）9月 エッセイ集『微風抄』（湯川書房）
- 〃 60年（1985年）9月 エッセイ集『江ノ電讃歌』（共著・大正出版）
- 〃 62年（1987年）8月 エッセイ集『走る歌 江ノ電』（朝日新聞社）
- 〃 63年（1988年）8月 エッセイ集『渚の消息』（湯川書房）
- 平成5年（1993年）10月 エッセイ集『午後の牧歌』（湯川書房）
- 〃 7年（1995年）7月 詩集『青雀集』（思潮社）
- 〃 （ 〃 ）8月 詩集『夢の汀』（透土社）

詩作に十分な時間を割くことができなかったようだ。しかし、海彦が最も充実していたのもこのころで、昭和33年にフリーとなり、活躍の場を広げて、毎年のようにイタリア賞、芸術祭賞に参加、数々の受賞を果たしている。

『朝日人物事典』（1990年）は次のように紹介している。

「戦後のラジオドラマは、戦前からのダイアログを重視した派とアメリカの影響下の都会派型のほかに、言葉による詩的な空間とイメージの昇華を試みたグループがあった。谷川俊太郎や寺山修司らだが、最も先鋭的に試みたのが伊藤海彦で、代表作「言葉と音楽のための三つの形象」で1958年度イタリア賞を受賞。65年「飛翔」で芸術祭賞受賞」。

昭和50年代になると、いまでも人気があるエッセイ集が次々に出版された。自然や季節の移り変わりに細やかな目配りをしたものだが、なかでも幼いときから親しんできた「江ノ電」についてのエッセイは珠玉のものであった。

「夏は当然のこととして、それ以外の季節でも江ノ電の床にはきまって砂がこぼれていたものだ。腰越でも鵠沼でも、細い道すじは簡易舗装などされていなかったし、海沿いの車道が今のように拒むような形で砂浜を遮断してはいなかったから、沿線の土地はどこも砂地の道が多かった。だからわざわざ海辺に行くまでもなく、砂は人々のはきものに付いて江ノ電の床にたえず運ばれていたのだ」
（『江ノ電暦日』）

そしてこのあと砂地の道は、幼年時代に毎夏をすごした腰越中原の方へと導いていく。

今年（平成15年）3月、鎌倉で海彦を愛する人々の集い「詩と音楽の時」があった。没後8年余、いまもなお愛唱される詩をもつ海彦は幸せである。

そのとき朗読された詩の一節を掲げる。

あなたのなかの夜と 私のなかの夜と
似ているものかどうか 私は知らない
あなたのなかの夜と 私のなかの夜と
どこで溶けあっているものかどうか それも知らない

しかし私は あなたのなかの小さな夜を
いつか どこかで 見たように思う

遠くさまよっていた少年の日 曇り日の街角で
また 眼をみひらいて待っていた 山小屋の窓の向うに

あなたのなかの夜と 私のなかの夜と
これは いったい何なのだ
声もなく 形もなく 暗く拡っているこの空間
とざすすべもない ひとつの窓

(詩集『黒い微笑』『小さな夜に』の最初の3連)

- 注¹⁾「同時代」は詩中心を標榜した同人雑誌だが、戦前の「白樺」にならい、文学だけでなく、音楽・絵画・彫刻など広く芸術全般をテーマにとりあげた。第1次(1948-54)創刊時の同人は伊藤海彦、宗左近、曾根元吉、宇佐見英治、矢内原伊作、安川定男、吉村博次、人見鉄三郎の八人で、8号まで発行。第2次(1955-93)全59号を経て、現在は第3次(1996-)の13号まで刊行中。この遠藤允彦の文は第3次「同時代」創刊号に載った。
- ²⁾「黒の会」は「同時代」の発行母体。同人だけでなく、寄稿者、定期購読者を含めた「黒の会通信」を出している。三輪誠の文は「黒の会通信17号(伊藤海彦追悼号)」に載った。このころは「同時代」が休刊していたため「通信」はページ数をふやした小冊子の形式をとっていた。
- ³⁾「江ノ電各駅点描」は『江ノ電讃歌』(1985年・共著)に所収。
- ⁴⁾海彦が片瀬西浜で遭遇したキティ台風は昭和24年8月31日、茅ヶ崎に上陸して藤沢にも大きな被害をもたらした大型台風。
- ⁵⁾全国市町村地図刊行会「神奈川県藤沢町鵠沼地番反別地目入図」(昭和5年5月30日発行)のものである。
- ⁶⁾「鵠沼庵」および中野一郎については「鵠沼」81号の特集「鵠沼海岸商店街 100年の歴史」を参照のこと。

旅先で出会った三人の鵜沼人の仕事

——天野芳太郎・長谷川路可・杉原千畝——

渡部 瞭(会員)

はじめに

筆者は、地理を教えるという立場上、これまで20回、60か国余りの海外旅行を経験した。旅先では、ツアーガイドをはじめとする旅行関係者ばかりでなく、商社マン、JICA職員や青年海外協力隊員、日本人学校関係者、研究者、新聞記者、外交官など、海外で活躍する多くの日本人に出会った。

そういった出会いの中でも、特に印象に残った三人の仕事の跡について、ここでは紹介してみたい。

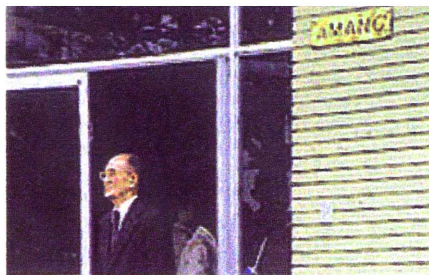
副題に掲げた天野芳太郎・長谷川路可・杉原千畝の三人である。

この三人は、それぞれ別の地域、別の領域で活躍し、お互いの接点は全くない。しかし、共通する三つの要素を挙げることができる。一つは海外での活動が国際的に高く評価されていること、一つはキリスト教徒であること、もう一つは期間の長短があるにせよ、鵜沼に住んでいた時期があることだ。標題に「鵜沼人」などを書いてしまったが、鵜沼人といえるのは長谷川路可ぐらいなもので、あとの二人は失意の時代を鵜沼で過ごしたともいえようか。



『華の聖母子』長谷川路可

天野芳太郎
博物館前で



カウナス
杉原記念館



天野芳太郎 日本のシュリーマン ペルー、リマ〈天野博物館〉で

この三人の中で、筆者が直接お目にかかり、親しくお話しさせて頂いたのは、天野芳太郎氏だけである。

1981年7月、ペルーの首都、リマの高級住宅地の一面に建つ〈天野博物館〉においてだ。氏が召天されたのは1982年10月14日だから、そのわずか1年あまり前ということになる。83歳という高齢だったが、背筋もシャンと伸ばされ、声にも張りがあって、その当時はお元気そうだった。(以下敬称略)

彼の案内で博物館の展示品を親しく拝見した。「ペルーの財産を金を取って見せたくない」との方針で、入場は無料、必ず案内人が解説する、展示品を手にとって触れられるということが守られている点に感心させられた。

展示物は「天野コレクション」と呼ばれるペルー各地の遺跡から出土した主にプレインカ時代の遺物である。どこかの金持ちが金にあかせて収集したというのではなく、天野自身が寒暖の差の激しい乾燥地で、何日間もテント生活をしながら発掘したものだ。

ペルーの歴史ではインカ帝国がよく知られているが、これは時代的には新しく、日本史でいうと鎌倉時代から戦国時代といったところだ。プレインカとは、紀元前1000年(日本では縄文後期)頃からのチャビン文化以降の各地の古代文化を総称しているもので、地上絵で有名なナスカ文化も含まれる。

「天野コレクション」はプレインカ全体にわたり、時代的にも地域的にも広範なものだが、特に中心をなしているのがチャンカイ遺跡の出土品だ。

チャンカイ文化はペルーの海岸部の沙漠地帯に、日本史でいうと平安末期すなわち大庭御厨^{おねぎみくりや}がつくられた頃の文化で、織物・編み物・染色といった繊維類^{ひもだし}の遺物に大きな特色を持つ。何段もの抽斗に整理された絞り染めの布や見事なレースを引き出して見せてくださる彼の目には、遺物に対する深い想いが込められていた。

もちろん、土器や木器の展示も豊富で、ガラスケースを開けて取り出し、手に持たせてくださる。それらを見て感じたことは、“チャンカイ人とは何と遊び心を持った人たちだろう”というものだった。チャンカイ文化の双注口壺には、一つの口から液体(チチャというトウモロコシを醸造した酒らしい)を注ぐと、反対の口から空気が入る時、笛が鳴る仕組みになっていたり、ジャガイモを掘り起こす細長いシャベルの柄にガラガラが仕掛けられていて、掘るたびに音が出る仕組みになっていたりするのだ。一つひとつに感心する見学者を見て、案内する彼は得意気だった。

天野芳太郎のことを「日本のシュリーマン(1822-1890 トロイ遺跡をはじめ多くの考古学上の業績を上げたドイツ人実業家)」と呼ぶ人もいる。前半生を事業で蓄財し、後半生の遺跡発掘にそれをつぎ込むという生き方からだ。事実、天野自身がシュリーマンに傾倒していたと語っている。

天野は1898(明治31)年7月2日、秋田県男鹿半島の寒村で生まれ、秋田工業学校を卒業後、19歳で横浜の造船所技師になった。

唐突な話題になるが、今年4月で宝塚ファミリーランドが閉園になるそう。宝塚遊園地は阪急電鉄が1911(明治44)年に開設し、私鉄経営のモデルケースとして注目された。すなわち、ターミナルデパート、田園都市、郊外遊園地をセットで開発する方式である。関東でこの方式を早速採り入れたのが1914(大正3)年開業の花月園だ。もっともこれは電鉄会社が直接経営を目論んだのではなく、新橋の料亭『花月』の経営者平岡広高により、児童の体位向上をうたい文句に開かれた。少女歌劇もちゃんとあった。

天野の商才が最初に発揮されたのは、震災後の復興期、花月園においてである。園内の売店では、名物のタイ飯や子育てまんじゅう饅頭が飛ぶように売れた。この〈子育て饅頭天野屋〉を開いたのが、新婚早々の天野芳太郎夫妻だ。

しかし、彼の夢は一介の饅頭屋では収まらなかった。約4年で貯めた2万円を懐に、1928(昭和3)年4月27日、渡航に反対する妻子と別れ、単身で横浜から大阪商船・博多丸に乗り込んだ。行き着いた先はパナマ。ここで彼は雑貨店〈カサ・ハボネサ〉を開いた。折からの世界恐慌にもめげず、事業は順風満帆、人種差別をしない彼の人柄に惹かれて、地元の人々の人望を集めることになった。

1930年代になると、〈カサ・ハボネサ〉はパナマの百貨店に発展し、南チリのアンダリエン農場、コスタリカの東太平洋漁業会社と、次々に事業を拡大した。生活にゆとりができた彼は、発見者=ビンガムの著書に惹かれてマチュピチュ遺跡(ペルー北部の切り立った尾根上に形成されたインカの都市遺跡)を訪れ、すっかり考古学の虜になった。

1940年代に入る頃、パナマ運河が一望できるパナマ市のクレスタの丘に、彼は邸宅を建てた。これがいけなかった。日米関係は一触即発の状態に来ていた。パナマ運河を眺める日本人がいることが米紙に報じられ、スパイの嫌疑がかけられたのだ。1941年12月7日、まさに日米開戦当日に天野は自ら進んで警察に出頭し、バルボア収容所で厳しい強制労働を科せられた。

1942年8月19日、横浜港に入港した捕虜交換船で、天野は日本に帰国することができた。

天野芳太郎が鵠沼に住んでいた時期があることを知ったのは、ごく最近のことである。高瀬笑子著『鵠沼断想』にそれは書かれていた。引用しよう。

「中南米に手広い事業をしていた天野芳太郎氏が、手頃な家を見つけて鵠沼に越してきたのは昭和17年か18年かと思う。高瀬通りから橋通りへ曲がって2軒目の瀟洒な邸である。彼は戦争で何もかも失って、菜ッ葉服に頭陀袋一つで、交換船カリブスホルム号(※グリップスホルム号が正しい)で帰って来た。初めの夫人は横浜小町と言われた美人で娘が二人あったが別れ、次の夫人は、スペイン系の人で、ペルーで結婚、子供と共に戦争の始まる前に日本に帰してあったのだが、天野氏が帰国して間もなく(※1944年8月11日)死亡、この苦しい時期を克服して再起するために、鵠沼で待機していたのである。小学生と中学生位の坊ちゃんとお嬢さんは行儀のいいきれいな子供たちであった。

天野さんは、事業家というだけでなく学者であり文化人であり著述家であって、博覧強記、話していると、シェークスピアが出てくる、聖書の詩篇が出てくる、「子曰く……」になったり、長恨歌になる。又、蘇軾の「赤壁ノ賦」を誦んじるといふ調子で、話はつきない。(後略)」[(※)の注とふりがなは筆者]

天野がいつまで鵠沼に住んでいたのか『鵠沼断想』には書かれていないが、高瀬笑子とは彼女が渡米してからも文通や著書の贈呈が続いた。

天野の南米への再出発は、きわめて劇的である。1951年2月14日、横浜からスウェーデンの貨物船=クリスタサーレン号に旅券を持たずに乗り込んだ。密出国である。ところが猛吹雪をついて出航した船は犬吠埼沖で遭難。13時間漂流した末、米国船に助けられ横浜へ。その1ヵ月後に、清水港から再び密出国。到着したペルーでスウェーデン大使館に駆けこみ「遭難で旅券を無くした」と嘘をついて得た保護旅券で入国を果たした。敗戦国日本の国民にまだ海外渡航の自由などない時代の話である。

ペルーで再開した天野の事業に、アンチョペータ(カタクチイワシ)の魚肥製造がある。フンボルト海流という寒流がぶつかってくるペルーの沖合は、世界一の漁獲高を誇る漁場に発展した。ペルー経済に貢献した天野の業績は多大なものがあるが、このことは余り注目されていない。

再び財をなした天野は、本格的にプレインカ文化の発掘・研究に熱中する。ユニークな視点からの提言は、考古学の常識をいくつも覆し、注目された。一方、泉 靖一博士ら日本の研究者への援助も惜しまず、アンデス文化の研究に果たした役割は大きい。

それらの成果をまとめたのが〈天野博物館〉なのである。

長谷川路可 国際的宗教画家 イスラエル、ナザレ〈受胎告知教会〉で

三人のうち、他の二人の仕事を見ることは初めから旅行目標に入っていたが、長谷川路可の仕事には偶然出会った。場所はイスラエル北部、ガリラヤのナザレ。〈受胎告知教会〉の聖堂の中だ。

イエス=キリストは「ナザレ人」とも呼ばれる。彼はこの世の生活の大部分を、このナザレで過ごした。彼の父親(厳密に言えば母=マリアの夫=ヨセフ)がこの町で建築業を営んでいたからだ。よく大工といわれるが、あちらの家は多く日干し煉瓦あるいは石で造られているので、木工部分は少ない。ヨセフの先祖は1000年近く前には王様だった。それも、ダヴィデ王というユダヤ人の最盛期を作り上げた歴史上最大の王様だった。その子孫が、なぜガリラヤというド田舎のナザレというちっぽけな町で建築業を営むようになったかという経緯はつまびらかではない。ただ、ダヴィデからイエスまでの28代の父系の名は、新約聖書の冒頭に書かれている。

マリアがヨセフと婚約した段階で、天使=ガブリエルが彼女の前に現れ、胎内に神の子を宿していることを告知させる。この時マリアが何歳だったかは判らないが、当時のこの地方の常識に従えば、10代前半だったのではなかろうか。驚きと恐れに打ち震えたに違いない。しかし、彼女は気丈にもこれを信じ、受け入れた。このことを記念して、326年コンスタンチヌス大帝の母ヘレナの頼みにより、マリアの家の跡とされる場所に築かれた教会が中東最大のキリスト教会とされる〈受胎告知教会〉である。

現在の聖堂は、カトリック=フランシスコ会によって14年かけて建造され、1969年に完成した。前庭にナツメヤシが涼しげな陰を落とし、白っぽい壁にベージュのストライプが施された石造の近代的な建物だ。壁面には聖母子、天使=ガブリエル、四福音書作者のレリーフが見られる。

内部に入ると、マリアのシンボルとされるユリの花をかたどったキューポラ下部の窓から差し込む光が斜めに落ちている。両側の壁面には各国の画家が描いたそれぞれの風俗を表す聖母子像の壁画が並んでいる。

それらの中でも一際異彩を放っているのが、和服姿の純日本風聖母子モザイク像『華の聖母子』だ。家紋を散らした青い着物を纏った長い黒髪のマリアが、赤いちゃんちゃんこに袴をはいたおかっぱ頭の幼子イエスを抱き、ボタンの花園に立つ像である。この姿は、細川ガラシャ夫人を念頭に描かれたとも伝えられる。これを描いたのが、長谷川路可だ。作品の素晴らしさよりも“へえ、こんなところにも路可の絵が”という驚きが大きかった。

この作品に接した段階(1985年8月)での筆者の長谷川路可に関する認識は、藤沢に住んでいたこと、カトリックの信者で、路可は洗礼名から採ったこと、フレスコ画とモザイクの技法をヨーロッパで学び、カトリックに関する作品を各地に残していること、そんなところだった。

彼が旅館〈東屋〉の二代目女将^{めがみ}=長谷川^{たが}多嘉の一人息子だということを知ったのは、恥ずかしながら、鵠沼を語る会に入会してからである。

路可に関する各種資料を当たってみると、「神奈川県出身」「東京生まれ」「鵠沼に生まれる」など、諸説がある。旧東屋のすぐ脇に住んでいた美術評論家の土方定一^{ひじかた}でさえ、「昔の東屋は、数年前、ローマで客死した長谷川路可の生家にあたっている。」(『岸田劉生』日動出版)と書いている。

高木和男元会長の『鵠沼海岸百年の歴史―追補補正版―』によれば、長谷川多嘉は杉村清吉と結婚、1897(明治30)年に長男=龍三を産んでいる。後の長谷川路可だ。ちょうどこの頃、叔母の長谷川^{あじ}榮が伊東将行の招きで東屋経営に参画しているから、清吉と多嘉は東京に住んでいたと思われる。

1907(明治40)年早々、清吉・多嘉夫妻は協議離婚し、旧姓=長谷川に戻った多嘉は、妹=榮や弟=欽一の住む鵠沼に来て、本籍を鵠沼村7365に独立させた。一子=杉村龍三は、多嘉が引き取ることになり、長谷川龍三となったが、暁星小学校の寄宿舎に残り、そのまま中学校へ進んだ。中学時代に院展に初入選したというから、天才少年である。

暁星は、1888年(明治21)年、カトリック=マリア会が創設したミッションスクールの名門校で、多感な少年時代をその寄宿舎で過ごした龍三少年に、カトリックの信仰がしみこんでいったことは当然の成り行きだった。

龍三少年が〈カトリック片瀬教会〉で洗礼を受けたのは、1914(大正3)年というから、美術学校を目指して修行中の16歳の頃だ。洗礼名はルカ。当時の聖書ではロカと訳されていた。蛇足ながら、鵠沼の名を世に紹介した徳富^{とくみ}蘆花も、築地の〈聖路加病院〉もここから来ている。ルカは新約聖書のルカ福音書と使徒行伝を書いた人物で、医師だったとされる。従って医師の守護聖人であるのは当然だが、画家の守護聖人でもあった。

東京美術学校で日本画を学び、1921年卒業後、すぐにフランスに留学している。フランスで日本画を学ぶわけがない。キリスト教美術の伝統的技法であるフレスコ画とモザイクを学んだのだ。路可という画号といい、彼のキリスト教画家としての意気込みが並々ならぬものであったことが窺われる。

1927(昭和2)年、フランスから帰国して東屋敷地内にアトリエを構え、翌年、〈カトリック喜多見教会〉で日本で最初のフレスコ壁画を制作している。

先頃、早稲田大学社会科学部研究室棟の壁の中から、縦横 1180×1180 mm の月桂冠を被った女性の上半身を描いたフレスコ画が発見された。この作品は1931(昭和6)年に理工学部建築科の今^{こん}和次郎教授と親交が深かった長谷川路可が、フレスコ画技法の実験的な習作として制作したもので、1960年代に建物改修の都合で上塗りされ、その存在が見失われていた。この作品は、現在〈早稲田大学會津八一記念博物館〉に収蔵・展示されている。

1937(昭和12)年、路可は鵠沼を離れ、東京目白に転居した。従って、彼が鵠沼に「住んだ」といえる期間は、わずか10年程度に過ぎない。

1938(昭和13)年9月7日、彼の母=長谷川多嘉が亡くなった。墓所の本眞寺の板壁には、長谷川路可の筆になる『歩む釈迦像』が遺されている。国際的なカトリック画家といっ^{りゅうぞう}てよい彼が描いた珍しい仏教画である。

一方彼は、二観音菩薩立像(原本=敦煌莫高窟藏經洞=唐時代・9世紀=大英博物館)、不空羂索觀音立像(原本=敦煌莫高窟藏經洞=五代時代・顯徳3年(956)=ギメ国立東洋美術館)という仏教画の模写を〈東京国立博物館〉に遺している。これはフランス留学時代にヨーロッパ各地の美術館・博物館を遍歴して模写したもの^{ふくうけんじやく}の一部で、全部で100点を超えるという。

路可が洗礼を受けた〈カトリック片瀬教会〉の今の聖堂は、1939(昭和14)年に献堂された。建築様式は教会としては珍しい純日本風で、この内部の装飾を長谷川路可が担当した。聖壇正面の2カ所の床の間を飾る2幅の掛け軸『聖家族』・『エジプト紀行』と両側の壁に飾られている『十字架の道行き』は彼の作品である。純日本風建築に合わせて、日本画を描いたのだろう。

長谷川路可の創作活動は戦後に活発化するが、その最大の仕事は、イタリア、チヴィタヴェッキアの〈日本聖殉教者教会〉のモザイク壁画の制作だろう。ドーム内面に美しい青い背景に浮かぶ桃山時代の衣装に身を包んだ聖母マリアと朱色の袴を着けておかっぱ頭の幼子キリストの聖母子像、壁面には日本二十六聖人殉教大壁画が描かれている。これにより、チヴィタヴェッキア市名誉市民に列せられ、1960年、第8回菊池寛賞を受賞している。

国内では、鹿児島=〈カテドラル・ザビエル記念聖堂〉の『ザビエル日本布教図』、長崎=〈日本二十六聖人記念館〉の『長崎への道』(フレスコ画)、東彼杵町=日本二十六聖人乗船場跡記念碑陶板などの宗教画の他、〈日生劇場〉ロビーの大理石床モザイク(1963)、東京五輪(1964)を記念した〈国立競技場〉の『野見宿禰』『勝利の女神像』なども手がけている。

1967年、ヴァチカンに招かれて収蔵品の修復・模写を仕上げ、教皇=パウロVI世に拝謁した直後の7月3日朝、脳溢血によりローマにて天に凱旋した。

杉原千畝 命のビザ発給 リトアニア、カウナス〈杉原記念館〉で

杉原千畝という一外交官の勇氣ある決断と行動が世に知られるところとなり、称賛を浴びることとなったのは、その行為からかなりの年月が過ぎてからだ。1980年代以来、テレビドラマやドキュメンタリー番組、多くの新聞記事や雑誌の特集などが取り上げ、筆者も知ることとなった。リラホールで開かれた講演会で、幸子夫人から直接にお話を伺い、「機会があったら、カウナスを訪れたい」と願うようになった。

その機会は2001年夏にやってきた。教職員の団体が企画した〈バルト三国ツアー〉の中に、旧リトアニア日本領事館〈杉原記念館〉見学が組まれていたのだ。既に教職を離れる段階だったが、ツアー参加を申し込んだ。

リトアニアのカウナス。この国、この都市を地図上ですぐに指摘できる人はそう多くはないであろう。かつて十字軍遠征から帰還したドイツ騎士団が、バルト民族を教化し、リトアニア公国を建国した。14世紀には東欧で最強といわれたこともあったが、以後はロシアとポーランドをはじめとする周辺諸国に蹂躪され続けた。ロシア革命後、東の間の独立を得た。その時の首都がカウナスだ。ナチスとの密約でリトアニアがソ連に併合される直前に、日本領事館が設置され、杉原千畝は領事代理として着任した。

中心市街は河港を中心とする川沿いにあるが、日本領事館は山の手の高級住宅地におかれた。夏緑林かりよくりんの中を曲がりくねって登る坂道の途中にそれはある。周辺の住宅と比べても、格段に立派でもなければ、貧相でもない。ごくごく平凡な地味な2階家だ。

こんなわかりにくい建物を、数千人のユダヤ人たちはどうやって尋ね当てたのだろうか？ 大都会ならば連絡も簡単かも知れないが、ポーランド各地を中心に数カ国からカウナスを目指してきた人々なのだ。彼らの持つ組織力と口コミ情報網には舌を巻かざるを得ない。

この年の春以来〈杉原記念館〉として公開されている旧領事館の内部に入る。さして広くない領事執務室が展示室になっている。この場所で「命のビザ」は不眠不休で書き続けられたのだ。一人のユダヤ人青年が、ささやかな展示物の解説を熱心にしてくださる。

真新しい「希望の門」の銅板が掲げられた門前に立って、狭い坂道を埋め尽くした当時のユダヤ人たちの「必死」のまなざし、カーテンの隙間からそれを見つめる杉原千畝とそこそご家族の心中を想像してみた。

目を閉じると、木々が風にさやぎ、時折鳥の囀りが聞こえるだけだった。

杉原千畝は1900年に岐阜県八百津町で生まれたが、公務員だった父の転勤で数回の転居を繰り返している。19歳で外務省留学生試験に合格し、ハルビンでロシア語を学んだ。その成果はロシア人も舌を巻き、恐れるほどだったという。また、ここでロシア正教とも出会った。このハルビンでの経験が彼の一生に深く影響することになる。さらに、この時代に外務省で出会った広田弘毅、森島守人という二人の鵠沼人との出会いも奇遇とばかりはいえない。

杉原 千畝のカウナスでの仕事は彼の一存で一月ほどの間になされた。それも、ある意味で非合法、命令違反の仕事だ。大変な労苦の末、帰国してすぐに、そのカウナスでの仕事により、彼は外交官という職を追われ、地道な後半生を余儀なくされた。ちょうどその期間を鵠沼で過ごしたわけだ。

初めは湘南学園近くの、森島守人も住んだことのある場所に何年かいて、後に江ノ電鵠沼駅からほど近い松が岡1丁目に移っている。

実は、今回紹介した三人の中で最も長期間鵠沼に住んだのは杉原千畝だ。彼自身の生涯の中でも鵠沼時代が一番長いのではなかろうか。しかし、仕事の方は、この世代の日本人としては珍しく、転職回数がきわめて多い。その大部分がロシア語と関わりを持つ。その最後の65歳から75歳までの10年間、国際交易(株)モスクワ支店代表として勤務している時代に、カウナスで発給したビザによって救われたユダヤ人によりやうやく探し当てられた。

1986年、杉原千畝は86歳で主に召された(この時は鵠沼から西鎌倉に転居されていた)。彼のカウナスでの仕事が広く一般に認識されるのは、その没後である。1992年になってようやく国会は彼の決断功績を評価し、外務省は過ちを認めた。後の祭りといわざるを得ない。

ユダヤ人社会における杉原の評価は極めて高い。一例を挙げると、杉原からビザを発給されたユダヤ人2139人のデータベースがある。ほんの出来心で、「KUGENUMA」という苗字の人物がいるか検索してみた。なんと2組4名もいるのである。「KUGENUMA」というヘブライ語が存在するとは先ず考えられないから、命の恩人=杉原の住所にあやかって改名したに違いない。

杉原千畝の仕事は、彼の決断と努力にによって成し遂げられたことには違いないが、幸子夫人の力によるところもきわめて大きいと考えられる。

夫人は市内瀬郷にお住いで、90歳のいまも執筆に講演に忙しい毎日を過ごしておられる。また、〈藤沢市民短歌会〉の会長として、鵠沼公民館にも定期的に足を運ばれている。先般、その機会を捉えて、鈴木編集長・有田会員と共に親しくお話を伺うことができた。その折に、この『鵠沼』にも寄稿して頂くことを依頼したので、楽しみに待つことにしたい。

おわりに

小稿は、筆者自身の体験を主に、短期間で書き上げた。手持ちの参考文献以外に、インターネットで得られる情報を大幅に活用した。

この三人に関するWEBサイトを検索エンジンで調べてみると、国内はともかく、外国のサイトがそれぞれおびただしく引っかかってくるのに驚かされる。長谷川路可の場合、HASEGAWA@Roka よりもLucas@HASEGAWA で引く方が多く出てくる。杉原千畝の場合、Senpo@SUGIHARA でもかなり出てくる。

冒頭の数行を除き、敬称は略させて頂いた。お許し願いたい。

【参考資料】

■天野芳太郎関係

産経新聞	天野芳太郎氏の生涯	2001年1月21～30日
高瀬笑子	鶴沼断想	武蔵野書房 1998
天野芳太郎／義井 豊	ペルーの天野博物館	岩波書店 1983

WEBSITE 天野博物館[<http://www.y-asakawa.com/andesugoe/amano.htm>]

鶴見歴史の会[<http://www.city.yokohama.jp/me/tsurumi/history/03kai.html>]

■長谷川路可関係

土方定一	岸田劉生	日動出版部 1971
高木和男	鶴沼海岸百年の歴史―追補補正版―	1981

WEBSITE カリッ片瀬教会[<http://www.cityfujisawa.ne.jp/~katasech/index.htm>]

早稲田大学／長崎市／鹿児島市／東彼杵町／日生劇場／国立競技場

■杉原千畝関係

杉原幸子	六千人の命のビザ	大正出版 1993
------	----------	-----------

WEBSITE 杉原千畝生誕100周年記念事業[<http://www.chiunesugihara100.com/j-top.htm>]

八百津町[<http://www.town.yaotsu.gifu.jp/spot/sugihara/sugihara.html>]

【連絡先】

天野博物館 MUSEO AMANO ※土日休（電話予約必要）

CALLE RETIRO 160 MIRAFLORES, LIMA, PERU／TEL:441-29-09

受胎告知教会 Basilica of the Annunciation

Casa Nova Street, Nazareth, ISRAEL (P. O. B. 23)

Tel: 06-6572501, Fax: 06-6460203

杉原記念館 Sugihara "Diplomats for Life" Foundation

Vaizganto 30, LT-3000 Kaunas, Lithuania

tel. (+370-37) 33 28 81／fax (+370-37) 42 32 77／sugihara@takas.lt

鵠沼に 80 年住んで

よき時代、よき友達

宮崎 弥代（鵠沼在住）

（大正 5 年 2 月 28 日生まれ）

最近ちょっと調べ度い事がありまして家のものからすすめられて「藤沢の地名」や「鵠沼を語る会会誌」を図書館から五、六冊づつ借りてきて読んで居りますと、六〜七十年前の事が浮んで、なつかしく思出して居りますが、殆ど（友達、知人、家族）亡くなられて寂しうございます。私は大正十二年一月頃、小学一年生の三学期に、東京麻布小から鵠沼小学校に転校して来ました。父（門田保蔵）の友人高松貞夫医師の勧めで喘息の兄（小三）と腺病質の私の為に高松家（貞夫氏のお父様良夫氏は藤沢町長）の借地に家を建てる間、堀川の山口新八さんの離れ（新築二階建）を借りて住み、父は京橋の店（輸入機械、建材会社）から一週毎に一回づつ缶詰や佃煮やビスケットなど運んでの生活でした。六月一日新築の家に引越、九月一日、始業式から帰って昼食一口、グラグランドカンと瓦屋根二階家は脆くもヒックリかえってしまいました。松の枝に廂がヒッカゝりその隙間から兄と飛び出してハダシで高松さんに走りました。高松さんの草葺の大屋根は稲鉢を伏せた様で誰れも見えない、そのうちにどこからか這出された先生に、祖母が出られないことお願いして家の方へ又走って、お隣の大倉別荘（これから建てる）の大工小屋の大工さん二人と一緒に屋根板を切ってハシゴを入れ、若い大工さんは祖母を負って助け出してくれました。腰を強く打った祖母は歩けないので大工小屋へ寝かせてもらい大工さんたちも早々郷里へ帰りました。母は自力で這出し浴衣はビリビリ少し血がにじんでいました。

お隣の作田さん（弁護士さん）の直子ちゃん、みどりちゃんも頭に怪我をして高松先生の手当を受けて、その小屋に寝かせ、まだまだ余震がゆらゆらしているところに海岸の方から大勢の人が「津波が来た」と裸足で逃げて来ました。見れば鵠沼饅頭屋の中野さんやら、水野久枝さん（東京からの転校生＝後の鵠生園、上村院長夫人）の御一家でした。生まれて間もない末の妹さん千鶴ちゃんは女中さんが抱きしめてつぶされたので紫色になっていて、この赤ちゃんも高松さんの

手当を受けてこの小屋に寝かせ、夕方頃津波も引いた頃だろうとボツボツ帰られるので、母は潰れた家から、浴衣や履物を出して、水野さんの御家族他、間に合せて上げた。その夜は掘立小屋のおかげで四帖半に十四人ヒザをかいて眠った。

以来水野久枝さん（中屋のお孫さん）のお宅とはお付合い、その後は新宿百人町へ帰られて、でも毎年夏は中屋さんの借家へ避暑にいらっしゃるので、その時季一緒に海に行ったり泊めて頂いたり、大勢のイトコさん方ともよく遊びました。

（小学生時代）その後水野久枝さんの妹の木村瑞枝ちゃんのお婿さんが決まったので、久枝さんは田中さんのおばあさま（写真77号10頁）が、かねてから決めていらっしゃった従兄の上村安一郎さんと、昭和12年に軍人会館（九段）で二組一緒に結婚式を挙げられました。戦争中久枝さん達は、宇都宮（日光）の陸軍病院に勤務されて、お子さんも無いのでスキの腕前はインストラクターをされるほどとか。

話はちょっと戻りまして、私は高瀬笑子さんが仰っしゃっているように、橘通りから南の方に、高瀬通り、宮崎通り、高松通り、熊倉通りがあり、私はこの宮崎通りの宮崎寛愛^{ヒロチカ}の長男寛正と結婚、夫は満鉄社員（小石川からの転校生で兄と鶴小三年からの同級生）で上村久枝さんのところに渡満の挨拶に伺い、種々話すうちに、久枝さんの従妹の田中八重子さん（よく一緒に遊んだ元子さんの妹）がホテルニューハルビンの近藤さんと結婚して居るとの事、驚きました。この数年前片瀬西浜にお住居の平尾アグネスさん（初代駐日アメリカ大使のお嬢さんで建築家の平尾敏也氏夫人）のお宅にちょいちょい伺った頃、御主人の敏也さんが知人の大分県人近藤林業の息子さんがお嫁さんさがしをしているので、私に「どうですか」と仰っしゃた。敏也さんは有り合わせの紙にスラスラと似顔絵を画いて、財産莫大なり、二十八歳法政大学卒（と今でも覚えている）私は財産家のお坊ちゃまは嫌いなのですぐお断りしました。「鶴沼」77号によりますと田中元子さんが一時満州にお出になったそうで多分その御縁だったのかも知れません。近藤林業といえば昭和十三年頃か鶴沼海岸駅の北側八ッ橋別荘（震災で潰れた屋敷跡に三軒の小さな借家を建てた）に井沢省一氏（大分県人、東大法科卒、ドイツに数年留学）が、恩師ステンベルヒをしたって、先生の近くに住む為に、大勢の家族とともに借家二軒を借りて住みました。当時の話では井沢弁護士は、近藤林業とハルビンの白系露人の某氏との裁判の弁護で勝って弁護士料でその年の多額納税者一位であったそうです。

その後、昭和十七年に私の兄（門田正也＝林学博士、名古屋大教授）と井沢省一氏長女と結婚しました。井沢氏は昭和二十年三月急性肺炎のため、惜しくも五十五歳で急逝されました。ハッ橋別荘は鵠沼海岸駅の北側で現湘南学園の方へ出る道の天理教会の反対側手前の左側で、長女の光子さんは戦后住んで居られると、昔の海浜医院福田良平氏次女、福田富美子さん（東屋親戚）から聞きました。八橋光子さんも、福田富美子ちゃんも、水野久枝さんも、私も鵠小一年同級生、三学期学芸会で光子さんは「花咲爺」のお殿様役、私は悪爺さんの役で、当時の写真があります。光子さんのお父様は早稲田文学部出身、坪内逍遙の直弟子であること御自慢で東京高円寺に家作を沢山持って居られる方で、国宝級の仏像も持って居られましたが、関東大震災では焼けなかったそうです。

「鵠生園」が軌道に乗って、一度見学させて頂き度いと、やはり小学校の友達の花本時計屋の奥さんヨッチちゃんと伺いました。院長夫人も白衣ならぬ水色の上着を着てショートスリーブの患者さん達とも声をかけたり、入浴の様子も見学させて頂き、私達もいずれお世話になり度いものと心強く思いました。木村瑞枝ちゃんが胃ガンで亡くなられたのはショックでした。それから又数年経って、久枝さんが私の母と同年九十歳のお母様を看て居られるとき、鵠生園より西海岸寄りのお宅（表札上村・水野）へ、ヨッチちゃんと一緒にお見舞いに伺いましたが何十年もお目に懸っていないのでお母様には分っていただけませんでした。大分舌も廻り難いようでしたが慈恵出の一人息子さん（久枝さんの弟、大震災後生まれた）が先日亡くなられたので「親より先に死ぬなんて馬鹿ですよ。親不孝ですよ」と廻らぬ舌で何度も何度も仰っしゃってましたので私達もお慰め仕様もありませんでした。（一年後亡くなられたそうです）でも私達がおいとまする時は戸口でハンカチを振ってさようなら、さようなら.....。

その後、上村安一郎さんが受章から数年経って亡くなられたことを新聞で知りましたが、お取込中を避けてまた桜本さんとお母様のお悔やみも兼ねて伺いました。御佛壇の周囲は、御両親と瑞枝ちゃん千鶴ちゃん健一さん、ぐると遺影がかかかってあって、私もあの頃を思い出して胸つぶれる思いでした。瑞枝さんのすぐ下の妹よしえちゃんはお元気とか、東京で....。平成九年夫（宮崎寛正）脳梗塞の後遺症で歩行困難の折、デイサーヴィスを受けられる様になって土曜日送り迎えの職員の方に上村先生の奥様は、東京の妹さんのところから近くの老人ホームへ入られましたと聞き、その後亡くなられたらしいことも耳に入りましたが、主

人もその後（平成十二年十一月）亡くなり何やかやと多忙の折、桜本のヨッちゃん、娘さんも「母が呆けたのでホームに入れた」とこれもたしかめるすべもなく、今となっては確かめない方が良くとも思っています。

1984年11月30日「鵠沼を語る会」議題は「松岡静雄先生」。広報みて申込み久しぶりに松岡家の皆様にお目に懸かれると思いきや、野口喜久子さんだけで私の顔見知り富士先生だけでした。松岡静雄先生の三人の娘さん（雪子さん、喜久子さん、かつみさん）とはよく行動を共にしました。麻布から引っ越してきた誼みででしょうか昭和七～八年頃はいっしょに大山登山や雪子姉様の勤められる横須賀高女の文化祭や羽鳥の三觜さんの柿園やら、讃美歌を唄いながら引地川^{いりちがわ}辺りを歩いて持ち切れない程柿をとったり。夏は神楽舎^{かみら}講堂の前の空地に大テントが張られ、東大國史学科の学生達（後の高麗大学教授李弘植^{イ・ホンシク}さんや、朝日新聞文芸部長扇谷正造さん、夭折された矢島栄一さん、NHK時代考証の小西四郎さん等）テント村で自炊、昼は海で泳ぎ、夜は燈籠流しなどなど合流して遊ばせて頂きました。御講義は湘中の先生方や、私の兄や後の夫達も参加して居りました。

当日の「語る会」は関東大震災の折、吉村別荘で東久邇宮第二皇子遭難され、東京へ帰られる際「軍艦云々」。一介の退役軍人がそのようなことが出来るのか？と、どなたか仰っしゃったので、私が姑（注1）に訊いた話だかと発言し「松岡初子夫人は野村子爵^{ノリ子}の姫様でかつて御両親は東久邇宮様の御養育係であり、初子様は御学友で「呉竹寮」に御出入遊ばして居られた御縁もあったそうです」と話しますと喜久子さんは大変喜んで下さいました。今度何時逢いましょうか「書道展が済んだら」と賀状を頂きましたのに書道展半ばで急逝され、かえすがえすも残念でなりません。御生前、喜久子さんの著書「砂のいろ」を下さいました。その後昭和五十三年婦人之友五月号に、かつみさんの「わが生活史」“サムシング”を求めて（入選作）を読んで、あの当時の事話合えるのはかつみさんだけ（雪子さんもとうに亡くなられていた）と、お電話したところ「東屋物語」発行記念に「鵠沼を語る会」が二月十四日あると伺い出席しました。

鵠沼公民館もすっかり新しくきれいになって椅子席は前の方をとって下さいました。何十年振りでかつみさんにお逢いしてなつかしさは一瞬にしてあの頃に戻りました。磐木さんの未亡人には、お好きだったチューリップを、かつ美さんには長谷川路可さんの画集を差し上げ、かつ美さんからは東屋物語サイン入を頂き再会お約束したのに、まだ文通だけに止っている、お互い出歩く事がむづかしくな

って…。

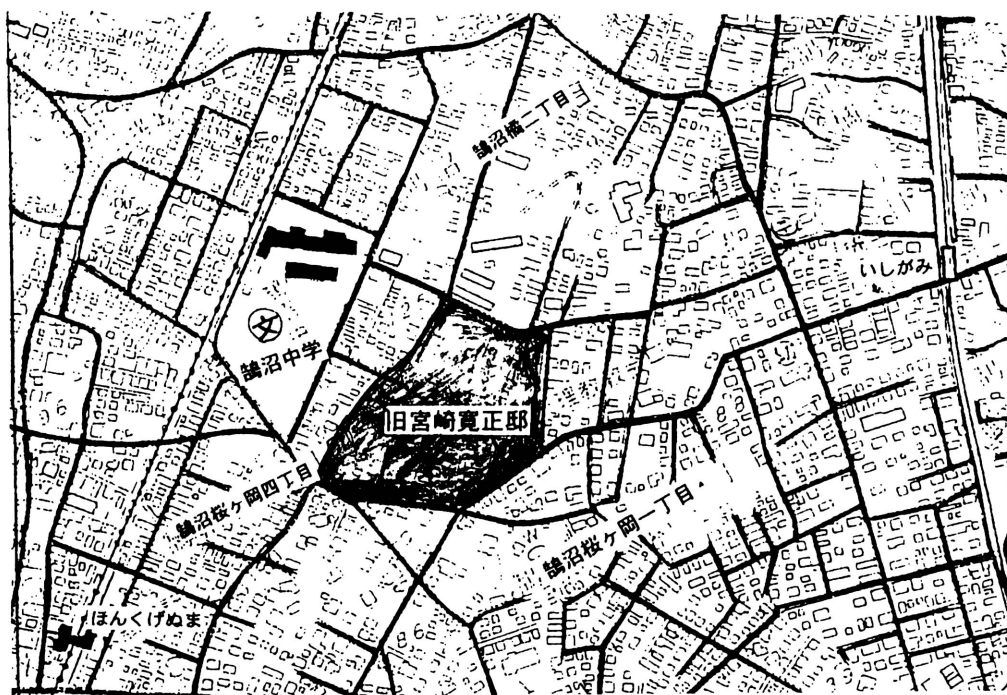
さて、当家夫宮崎寛正（平成 12 年）並に弟寛明（元順天堂大学学長、シベリア四年間抑留、平成 13 年没）相次いで故人となり、遊行寺内の墓地に眠って居ります。高瀬通りの高瀬さんのお墓は斜後で、両家とも元の住居と同じように隣接しております。

まだまだ書き足りないのですが、又にゆずりましょう。因に昭和 18 年、宮崎寛愛没後は旧宮崎邸に安齊実氏（日本ライフル協会会長）がお住まいで、氏も先年亡くなりましたので、ご長男直孝氏には、先日昔の宮崎邸の写真をお目に懸けました。

平成十四年九月五日

（注 1） 姑、宮崎ミカは長州萩の出身、伯母の林静子は奇兵隊林伴七（伯爵）の息に嫁ぎ、女官長時代は北白川妃、東久邇宮妃の御養育係、後任は野村子爵。

<編集部注記> 本稿は「鶴沼を語る会」が昨年 9 月、藤次市教育委員会の協賛をえて「華ひらく鶴沼文化」展を市民ギャラリーで催したさい、筆者自ら見に来て下さり、沸き起る思い出の数々をそのまま書き綴り、送って下さったものです。高瀬通り、高松通り、などとともに宮崎通りとして町名に名を残す名家です。その所在を地図で示しておきました。また次頁にその写真も添えておきました。



宮崎邸（昭和2年頃～昭和18年）



正門



車寄せから見た母屋（この一部は現在の安齋邸に残されている）

「二つの湘南文庫」補遺

伊藤 聖（会員）

『鵠沼』83号（平成13年9月）で「湘南文庫」が本鵠沼と鵠沼海岸の2か所にあったという話を書いた。そのとき当時の東京新聞（昭和20年10月23日付）を引用して「驚いたことは、敗戦後4日目の8月19日に開店していることである」と記述した。

最近になって、藤沢市総合市民図書館が発行している『わが住む里』第28号（1976年）に「湘南文庫のころ」と題して、田中直光さんが一文を寄せていることが分かった。83号の訂正の意味で補遺を書いておく。

＊

それによると、空襲、疎開、飢餓の真最中の戦争末期の昭和20年春、人々の心に潤いを与えようと、林達夫さんの呼びかけで貸本屋を開こうということになった。新しい本の入手など不可能な時代だった。最初の会合は林さんの隣の南部圭之助さんの応接間で開かれ、林、南部、田中さんのほか、山口薫、伊東安兵衛さんらが集まった。図書の供出には長谷川巳之吉、邦枝完二さんらの協力もあった。

鎌倉でも高見順、川端康成氏らによる「鎌倉文庫」が始められていたので、林、山口両氏は鎌倉まで出かけて、いろいろ準備の段取りなどを調べたりしたという。鎌倉文庫が開店したのは昭和20年5月1日だが、林さんたちの「湘南文庫」がいつ開店したのかは分からない。

場所は本鵠沼駅に近い金田さんの書道塾隣の藁屋根の家を事務所にしたが、もう一つ鵠沼海岸駅の直ぐ前、番場米店の隣にも別に家を借りて、棚やカウンターを設け、貸出しに便利なように改造した。極端に物資不足の折で、木材などの入手も困難だったので、田中さんの弟の四郎さんが世話したという。図書集め、店舗の改造など準備にかなりの時間がかかったようである。

間まもなく田中さんは召集礼状をうけた。

「湘南文庫の趣旨に賛同し、喜んで図書を提供した。そして大いに手伝うつもりでいたところ、数日にして応召の通知が市役所から届けられた。中二日おいて出征である」

「平塚が空襲で焼け、海岸のハイ・ウェイを避難者の群が続いた。入隊はその翌日である」

平塚空襲は昭和20年7月16日であるから、田中さんの出征が7月中旬だとすると「湘南文庫」開店は6月末から7月初めとみていいだろう。いずれにしても戦時中で、敗戦後ではなかった。

本鵠沼のほうはともかく、鵠沼海岸駅前の湘南文庫は、利用する人が殺到したという。田中さんは「毎日の貸出し事務には、数人のお嬢さん方が篤志で担当して下さい」というから、邦枝さんや室伏さんのお嬢さん方も手伝われたようだ。しかし、間もなく貸し出した本が返ってこなくなる。保証金は預かったものの、当時、本は貴重品であった。人々の善意を信じた貸出し計画の盲点であった。

8月に入ると原爆投下、ソ連参戦と戦局は急迫し、貸本屋どころではなくなった。おそらく湘南文庫は戸を閉め、開店休業の状態だったと思われる。

平和が戻り、日本が文化国家として再建されることになって、林さんは湘南文庫の再開を目指す。8月19日以降「湘南文庫を開設」したという東京新聞の記事は、正確には「湘南文庫の再開」だったのである。敗戦後4日目で開店したという素早さのナゾは、これで納得できる。だからといって林さんの功績が過小評価されるというものでもない。田中さんは出征していて、この間の事情について知らなかったようだ。

湘南文庫がいつ解散したのかもよく分からない。戦後再開して、数年（？）存続したことは、復員してきて本を借りた芥川比呂志さんの一文によって知ることができる。しかし貸し出した本が返ってこないことは、一層ひどくなったようだ。田中さんは次のように書いている。

「湘南文庫は言うなれば本の不足によって閉鎖解散せざるを得なかった、と見るのがやや正確のように思われる。しかしその期間は、まことに短かったが開設した意義はあったと評価されてよいと思う。私は二百冊近い本を供出し閉鎖にあたってその四分の一程度の本が返されてきた。時折り書庫の入れ替えなどする際、湘南文庫の印が扉に押されており、ナンバーがあり、その一部に提供者の印「秋湖」（私の号）の押されてあるものを発見したりすると、当時を思い起し懐しい気持ちでいっぱいになる」



関根久男さんをしのんで

柳谷あき子

〔元藤沢市議会議員・市政市民会議〕

「死ぬまで（市議会議員を）やるだ！」といつもおっしゃっていました。その言葉がこんなに早く現実になってしまうとは思っていませんでした。

議場での追悼式で、山本市長が関根さんの議員席にむかい、語りかけるように「あなたはいつまでもずっと、そこに座っていらっしゃると思っていました。」と話されたと聞きましたが、本当に関根さんの死は、誰もが想像だにできないものでした。

私が市議会議員に初当選した時（1983年）関根さんはすでに7期目という大ベテラン。他に西条節子さん、津田万次郎さんという大先輩の方々の会派に入れていただき、たくさんの方の事を教えていただきました。

現在、国民の政党離れに伴い「無所属」が大流行ですが、藤沢市にはもうすでに、この頃から無所属の議員が会派を組めたということは、全国的にも注目されており、関根さんはまさに先がけであったと思います。

市民一人一人のニーズに基づき、弱い立場の人々の視点に立ち、共に行動し市政を考えてゆく「行動派」の議員としての姿勢を教えていただきました。

私と関根さんの最初の出合いは、私が保母だった時だと思います。自転車で息子さんの送迎をしていらっしゃいました。その時同僚が「あの方議員さんよ。奥さまの体が弱いらしく送迎していらっしゃるの。きさくでえらぶらなくて、いい方よ。議員さんが皆関根さんみたいだといいのにね。」といっていたのを覚えています。

スリッパをはいて役所中を歩き回り、議場に入る時はくつ下をはき、くつをはく。いつもの議員よりも先に席についていました。

お昼は必ずお弁当持参。自らつけたおいしいつけ物をよくいただきました。

私が議員1期目の時、市の職員の方に質問したくてウロウロしていると、電話で「関根だけ」と控室にすぐ呼んでくださいました。「すごーい、関根だけでわかってしまう」それは当然です。その時すでに、どの部長よりも、市役所のことも、市の政策も詳しく知っていたのですから。

関根さんは戦前から、農民運動・労働運動・公害闘争と、数々の市民運動に関わっていらっしゃいました。その経験に基づくたくさんのお話や、昭和20年代・30年代の藤沢市議会の「裏ばなし」を聞かせていただきました。

まさに藤沢の「生き字引」だったと思います。

私が関根さんの行動が「本物」だと感心したことは多々ありますが、その一端を紹介させていただきます。

私が1期目の時、会派視察で姫路城に行った時「私は入らない。あの石垣の石を運んだのは、私たち庶民だ。殿様の言いつけとはいえ、どんなに心も身体もつらかったか。」

とけっして中に入ろうとはしませんでした。

また、伊勢神宮に行った時も、私は好奇心で物見遊山気分でしたが、関根さんは厳しい顔で、やはり一歩も中に入りませんでした。

昭和天皇が亡くなられた時、私の「テキ屋のお兄さんたちも商売ができなくて困っている」という発言をきっかけに、議会が空転してしまった時、関根さんは「赤紙」を持ってこられ「こんな紙きれ1枚で死んだ人がたくさんいるんだ。ガンバレ」と励ましてくださいました。平和に対する強い思いを感じました。

2期目の時、藤村久子議員と二人で、どうしても消費税導入に賛成したくなく、しかし与党である（その時の市長は葉山峻氏）私たちが反対すると予算そのものが否決されてしまう状況の中、私たちは休憩時間中に遠出をしてしまいました。板挟み状態の私たちと行政と議会の中に関根さんが入ってくださり、無事に収めてくださいました。

3期目の頃、関根さんは「自分史」に取りくんでいらっしゃいました。議会の合間に控室で熱心に書いていらっしゃいました。「私は皆みたいに学歴がないから……」とおっしゃりながら。

とんでもないことです。関根さんの知識、そして暗記力、何十年も前のこと、それに伴う数字的裏付けをしっかり覚えていらっしゃるのには、本当に驚かされました。

今年の1月5日の賀詞交換会で久しぶりにお目にかかり、「今年はぜひ関根さんを応援させてください。何かできることがあったら。」と申しあげると、うれしそうに「たのむよ」といつてくださいました。

1月26日、関根さん宅で集会が持たれました。関根さん宅の1階が、人、人、人でうまりました。やせてはいらっしゃいましたが、体力も気力も、やる気も充分でした。

私は司会をつとめさせていただきました。全市から様々な立場の人が参集され、関根さんに対する思いを語ってくださいました。そして数々の政策提案の際「湘南市構想」について聞かれると、「藤沢市民の税金は、藤沢市民で使うもの。反対！」と、りんとした声で、はっきりおっしゃった姿が目につきます。

2月15日にも集会が予定されていましたが、12日に倒れられ、17日朝亡くなられました。「子どもたちと兄弟だけの密葬」関根さんの遺言だそうです。お目にかかることができず、悲しみのやり場に困ってしまいましたが、最後まで「関根さんらしい」と納得しました。

今、経済不況、戦争の足音がすぐそばに聞こえる中、関根さんには、ぜひとも藤沢市を、そして世界を見つめ、政治家として政策提案をしながら、私たちと行動していただきたいかった。

もう一度、質問の最後に必ず「……以上！」と結ばれる大きな声が聞きたかった。

自転車で藤沢中を走りまわる姿、時々見せられたやんちゃ坊主のような笑顔……。思い出はつきません。

関根さん、ちゃーさん、団長、お疲れさまでした。安らかにおねむりください。本当にありがとうございました。

「鵠沼を語る会」活動の記録

(平成 14 年 10 月～平成 15 年 3 月)

総務委員会

平成 14 年 10 月例会 10 月 8 日(火) 10 時～12 時 26 名出席

議題 1. 市民ギャラリーの「華ひらいた鵠沼文化典」総括(内藤会員) 一会期 12 日間で

総入場者数約 3200 人、1 日平均約 270 人、内アンケート回答総数 257 人。また、希望の多かった特集号の作成については編集委員会で検討することになった。

2. 鵠沼公民館まつりの展示(10/26～27)について(内藤会員) 一テーマは「鵠沼の半纏」とする。収集担当は、職人と消防団のものは内藤会員、お祭りのものは浅野会員、趣意書作成は鈴木、内田両会員の担当になった。

3. 鵠沼文学散歩について(中島会員) 一江の島探訪倶楽部との共催の、文学散歩はコース下見も終え、来る 10/17(木)に実施する。当日午前中に当会が講義を担当し、「東屋について」は伊藤会員、「芥川龍之介関連」は有田会員、「岸田劉生について」は岡田会員がそれぞれ行う。

4. 「会誌鵠沼」85 号について(鈴木会員) 一印刷日 11 月 5 日(火)、発行 160 部。

5. ホームページ委員会報告(渡部会員) 一何をのせるか今後検討する。

6. その他(1)鵠中文化祭について(佐藤会員) 一9 月 27 日(土)午前中、「鵠沼ってどんなところ?」のテーマで展示したところ、見学者に大いに好評であった。

(2)第 5 回ふじさわこどもまちづくり会議について(佐藤会員) 一11 月

9 日(土)、10 日(日)鵠沼地区を対象に行う予定。当会より渡部会員がこども達に「鵠沼の地形」について話すことになっている。

運営委員会 10 月 29 日(火) 10 名出席。

平成 14 年 11 月例会 11 月 12 日(火) 10 時～12 時 22 名出席

議題 1. 「鵠沼公民館まつり」総括(内藤会員) 一会場が昨年より狭くなったが、地区内各所から半纏 48 着提供された。展示も工夫して、説明文を少なく半纏を多く拵げてビジュアルにしたことが非常に好評であった。

2. 「鵠沼文学散歩」の報告(中島会員) 一10 月 17 日(木)に 57 名参加でおこなわれた。午前中は当会講師による講義、午後は、江の島探訪倶楽部員引率で文学散歩を行い午後 3 時に無事終了した。参加者には好評であったが、東屋のほかにも案内板や説明版が欲しかったとの声があった。

3. 「こどもまちづくり会議」の報告(佐藤会員) 一こども 40 名参加して盛会であった。渡部会員の説明は、小学生向きのやさしい言葉で分かりやすいと喜ばれた。ただ、時間がなく説明不足に終わったことは残念であった。

4. 「郷土資料室」準備委員会について(伊藤会長) 一市側が内部の、教育委員会と市民自治推進課と基本的な合意ができていないため、いつ開かれるか不明である。しかし、当会としては貴重な郷土資料である塩沢コレクションがあるので、今後の諮問に備えて、会の準備委員会の委員を改めて再確認する。伊藤、浅野、岡田、内藤、松岡、渡部、中島の 7 名の会員である。

5. 「鵠沼」85 号配布について(伊藤会員) 一各担当者に、欠席会員と寄贈分について手渡された。

6. 来年の新年会について(中島会員)一和食系で決定。会場はそばやのやぶ茂を予定、1月例会(1/14)終了後に行う。設営は中島会員、余興は内藤、内田会員が担当。

7. その他(1) 12月例会の時間変更—12月10日(火)13:00~15:00 学習室1B...

(2)アンケートのまとめ(松岡会員)一先の「鵜沼文化展」に実施した、アンケートの集計結果を発表した。

新入会員 西原良子氏 紹介。 運営委員会 12月3日(火) 9名出席

平成14年12月例会 12月10日(火)13時~15時 18名出席

議題1. 来年の新年会について(中島会員)一会場は松が岡3丁目のそば屋「やぶ茂」。

時間、12時~15時、会費3100円(100円は余興の景品代)。

2. 公民館センターの「郷土資料室」について(中島会員)一神崎館長から12月末ごろ、第一回の準備委員会を開く予定につき、代表を1名出してほしいとの要請あり。会代表に伊藤会長を決めた。

3. ホームページ委員会報告(渡部会員)一何をのせるかは、委員会で決めて例会に諮る。単純に多数決ではなく、賛成、反対意見を幅広く聞いて決めたい。

現在はテスト版であり、とりあえず、掲載を了承している執筆者の分からのせたい。その後、会の目的や、プライバシー保護等の問題について活発な議論が出た。

お話—渡部会員より「蓮池」の話があった。

運営委員会 12月24日(火) 10名出席

平成15年1月例会 1月14日(火) 10時~12時 21名出席

議題1. 年間スケジュールについて(伊藤会長)一例会日程、3月例会の会場変更—3月11日(火)「鵜沼市民の家」で行う。

- a. 史跡めぐり(中島会員)一文人、文化人の旧居をたずねて、花見もかね、4月1日(火)10時~14時予定、コースは鵜沼松が岡、藤が谷地区、終点の鵜沼藤が谷公園で昼食、歓談し解散する。

- b. 5月総会の準備(伊藤会長)一新年度役員(案)、その他の(案)を3月の運営委員会で討議し4月の例会で決めたい。

- c. 郷土資料室の開設(伊藤会長)一神崎館長より、まだ準備委員会の招集がない。

- d. 公民館まつり(伊藤会長)一5月より市民センターが開設されるので、どうなるか今のところ不明。

- e. 会誌「鵜沼」発行について(伊藤会長)一86号は3月末、87号は9月末に予定。

2. 「鵜沼文学地図」の作成について(中島会員)一藤沢市制50周年を記念して発行された、「藤沢文学展」の末尾に記載されている藤沢文学地図の鵜沼版を作成し説明した。問題点が数多くあり、完成には程遠い。「文学」としているが、学者もいれば政治家もいる、いわゆる文化人とした場合の線引きをどこにするのか。和辻哲郎らが住んだといわれる高瀬邸は敷地が広大で特定不能である。

その他—12時より会場を移して、そば屋「やぶ茂」にて新年会を行う。関根会員は都合で例会途中に退席して欠席し、参加者18名。最長老の鈴木三会員の音頭で乾杯して新年を祝い、宴会に入る。飲み物、料理ともにたっぷりで、特に、店主自慢の手打ちそばがうまきお替りが続出した。内藤、内田両会員の尽力で100円会費のくじ引きは、豪華な品物でみなびつくり、包みを開けたたびに歓声が上がって大いに盛り上がり、和気あいあいのうちにお開きとなった。

運営委員会 1月28日(火) 11名出席

平成15年2月例会 2月11日(火) 10時～12時 19名出席

議題 1. 郷土資料室の開設について(伊藤会長)—神崎館長は、今月中に準備委員会を開きたい意向あり。

2. 史跡めぐり(文学散歩)について(中島会員)—4月1日(火)に行われる、史跡めぐりのコース(案)を発表した。コースには文人だけでなく、学者、芸術家、政治家らを含んでおり、他に「大曲り」のような歴史的史跡を入れたため、コースが長くなってしまい、短時間で果たして廻れるかどうか？

3. 鶴沼文学地図の作成について(中島会員)—鶴沼にゆかりのある文人だけでなく、著名な文化人、政治家、スポーツ選手等を調べて、場所の判明した人たちを地図上に掲載してゆきたい。とても一人や二人でできるものではなく、会を挙げて取り組む大事業である。

4. 今井達夫『鶴沼物語』の発行について(鈴木三会員)—鶴沼の作家、今井達夫氏が慶応大学理財学部有志の同人誌、「三田理財クラブ125」に4回にわたって掲載した「鶴沼の作家達」を遺族の了解を得て、青木会員が一冊の本にまとめた。今井氏が実際に接した鶴沼ゆかりの作家達を描いた、貴重な歴史的資料なので会の名前で発行することに意義がある。印刷日、発行部数等未定であるが会として発行することに決めた。

5. 会誌「鶴沼」86号について(伊藤会長)—岸田劉生のアトリエ、海外で有名になった鶴沼の3人、宮崎さんの鶴沼回顧録、伊藤海彦等の内容で確定し、3月24日(月)に印刷する。発行部数160部。

お話—有田会員による「鶴沼の大給家」について話があった。

- * 当会の顧問である関根久男氏が、2月17日にすい臓がんで逝去されました。1月例会にはお元気で出席されておられて、僅か一か月で亡くなられ、会員一同驚きをかくせません。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

運営委員会 2月25日(火) 12名出席

平成15年3月例会 3月11日(火) 10時～12時 19名出席 (鶴南市民の家)

議題 1. 郷土資料展示室について(伊藤会長)—2月24日に第一回目の準備委員会が行われ、市側の方針を聞いた。この部屋は、郷土の歴史的文化的資料を展示する目的で作られたもので、郷土資料を保管する場所は考慮していない。貴重な郷土資料である塩沢コレクションを保管している会としては、この方針にまったく納得できず、5月に開かれる予定の検討委員会に保管場所の設置を強く要請することにした。なお、会から選出する検討委員に内藤、中島両会員を指名した。

2. 5月総会の議案書作成について(伊藤会長)—役員の変更、来年度の重点行事、予算項目例会のありかた等のことについて、今月の運営委員会で具体案を練って4月例会に諮りたい。

3. センター棟の談話室について(岡田会員)—公民館の新館、センター棟が完成して5月から使用できるようになった。第一談話室、第二談話室、第三談話室、第四談話室である。

4. 鶴沼文学散歩について(中島会員)—会の毎年の定例行事である、「史跡巡り」のコース最終案を決めて発表した。先月の例会でコースに近い人達も入れることにしたので、対象者は、30名を越すことになった、一人一人のコメントをつけたコース説明書をコース地図に添えて説明した。全てのポイントを説明することは不可能なので、重点的に説明するポイントと説明者を決めた。4月1日午前10時、小田急鶴沼海岸駅前集合 弁当持参、雨天中止。参加予定者15名。

編集後記

- *新聞を読んでもテレビを見ても暗いニュースばかりで明るいものは殆どありません。正に憂鬱時代です。それなのに「憂鬱」という言葉は現在ではあまり使われず姿を消そうとしています。
- *国学者で歌人であった土岐善麿は戦時中に“はじめより憂鬱なる時代に生きたりしかば、しかも感ぜずという人の我よりも若き”という歌を残しています。今の若い人々はどう思っているのでしょうか。
- *「語る会」にも暗いニュース、関根久男氏の訃報が届きました。例会にときどき出席されていましたが、市会議員でいらしたにもかかわらず寡黙な非常に地味な方で、私たちもお話する機会が殆どありませんでした。生前親しかった柳谷さんをお願いして追悼文を寄せていただきました。関根氏もきっと喜んで下さることと思います。ご冥福をお祈りいたします。
- *岡田、伊藤、渡部三会員の労作はいずれも「語る会」の健在さを示すものといえます。とくに岡田氏の労作は、劉生の住んでいた家再構築の決定版であることを願っています。
- *最後に私事にわたって恐縮ですが、この「後記」を書いてきた小生も、この3月に卒寿を迎えましたので、「後記」も卒業することになりました。今後ともよろしくお願いいたします。(鈴木)

『鵠沼』 第86号

平成15年 3月31日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵠沼を語る会

藤沢市鵠沼海岸2-10-3

鵠沼公民館内

電話0466-33-2001